

VIEWnext

先生方と共に創る 教育情報&オピニオン誌

[ビューネクスト] 高校版

2025

11

November

特集

どうすれば**見直**せる？ 学校の「あたり前」

表紙の学校
奈良県・私立
天理高校



品 今号の掲載校

鳥取県立米子東高校 / 長野県野沢北高校 / 愛知県・私立滝中学校・滝高校 /
兵庫県・私立滝川中学校・高校 / 岩手県立千厩高校 / 千葉県・私立東葉高校 /
富山県立魚津工業高校 / 長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 /
千葉県・私立芝浦工業大学柏中学高校 / 新潟県立中条高校 / 北海道滝川西高校

先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

200人の生徒全員の担任に
なることを誓った私が、
40人を前に自問した
クラス担任としてのあり方

鳥取県立米子東高校 蓑原知也

みのはら・ともや ●同校に赴任して1年目。教頭。
英語科の教師として、協働的な学びの実現を目指した
授業づくりをいち早く実践してきた。
バスケットボールの指導にも力を入れ、
鳥取県バスケットボール協会の技術委員長を務める。

30 代半ばで初めて学年主任を拝命し、1学年のクラス担任も兼務しました。最初の学年集会では、「200人全員の担任のつもりで君たちと向き合います」と、生徒の前で宣言しました。学習時間調査や校内実力テスト、模擬試験などの結果の分析に力を入れるとともに、「学力＝生活力」という信念の下、遅刻や服装の乱れなどをなぜ見逃せないか、丁寧に説明しました。200人の生徒全員に自分のことだと思って聞いてほしいという思いから、学年全体に向けた私の言葉はおのずと厳しいものになりました。学年集会が終わり、担任を務めるクラスの教室に戻ると、生徒たちは静まり返っていました。張り詰めた空気に、「私の思いは伝わっている」と手応えを感じました。

一方で私は、思うように自分のクラスの生徒たちと時間をかけて向き合えていないことを自覚していました。学年の業務を優先し、個人面談を副担任にお願いする度に、「担任だけなら、もっと生徒にかかわれるのに……」と思いました。

ある日、学年集会が終わって教室に戻る途中、「私の言葉は自分のクラスの生徒たちに本当に届いているのだろうか」という疑念が生まれました。200人の前で語る言葉と、40人に向けて語る言葉は違うはず。担任としての私の顔を見せよう。私は教壇から、生徒一人ひとりの表情を確認しながら語りかけました。「1年生は家庭学習が足りないって話をしたけど、みんなは、私が担当する英語はちゃんと勉強しているから、安心しているよ」「学校の授業を信頼してほしいって話もしたけど、ここだけの話、相性が合わない先生もいるよね。そんな時は塾に頼る前に、私に相談に来てね」。そうした私の軽口は、生徒たちの表情をほぐしていきました。1人の生徒が、「数学の質問をしてもいいんですか？」と声を上げると、別の生徒が、「蓑原先生は英語の先生だよ。よくないよ！」などと口を挟みました。これまでとは違う空気が、教室を満たし始めました。

それから3年間、私はその学年の学年主任とクラス担任を受け持ちました。卒業式の日、私は生徒に、担任としての務めを十分には果たせなかったことを何度も詫言しました。いよいよ別れという時、クラス委員の合図で生徒一人ひとりが1輪のバラを手に、私の前に歩み寄りました。何人もの生徒が、「先生の厳しい話は、全部自分のことだと思って聞いていました」と言ってくれました。生徒は、40人の担任であり、200人の担任であろうとした私を理解してくれていたのです。

担任として、学年主任として、蓑原先生が追求したことは何だったのか。社会が変化する中、先生が大切にしてきた学校のあり方や教師の役割も変わっていくのか。蓑原先生が語ったウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article32489/>



巻頭

先生なら、どうしますか？

200人の生徒全員の担任になることを誓った私が、
40人を前に自問したクラス担任としてのあり方
鳥取県立米子東高校 蓑原知也

2

特集

どうすれば見直せる？ 学校の「あたり前」

4

課題整理

東京都公立小中一貫校管理職、一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所認定トレーナー 茂木正浩

8

事例 1

業務負担の軽減／持続可能な探究学習 長野県野沢北高校

11

事例 2

教師の勤務形態／部活動の実施形態 愛知県・私立滝中学校・滝高校

14

事例 3

業務負担の軽減 兵庫県・私立滝川中学校・高校

17

事例 4

校則の見直し 岩手県立千厩高校

20

Column

認定特定非営利活動法人カタリバ 藤本雅衣子

22

指導変革の軌跡

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

千葉県・私立東葉高校
学校改革

26

大学入試トレンド解説

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

2026年度大学入学共通テスト直前期の
出願指導のポイント

30

ウェブ連載記事 ダイジェスト

New

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

「中核的な概念」の理解が深まる授業デザイン

工業

富山県立魚津工業高校 佐伯智成

化学

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 樋本六秀

「やらされ探究」から「マイ探究」へ！

千葉県・私立芝浦工業大学柏中学高校
新潟県立中条高校

事例で深める！ 学習評価

北海道滝川西高校

<https://view-next.benesse.jp/>

本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINE でもご覧いただけます。

印刷製本／株式会社協同プレス 編集協力／有限会社ベンダコ 撮影協力／荒川 潤、岸 隆子、
ヤマグチイッキ イラスト協力／カモ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。
※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。©Benesse Corporation 2025

巻末

Reader's VIEW

どうすれば見直せる？ 学校の「あたり前」

弊誌では毎年度、全国の読者の先生方を対象としたアンケートを実施し、先生方からいただいたご回答を、次年度の弊誌の企画立案のよりどころの1つとさせていただいております（※1）。昨年度と同アンケートでは、2025年度の弊誌で取り上げてほしいテーマについても伺ったところ、学習評価のほか、学校の「あたり前」の見直しに関連するテーマにも票が集まり、中でも管理職の先生方から多くのご要望をいただきました（図1）。それは学校を挙げての資質・能力の育成や変化する大学入試への対応、教育DX（デジタルトランスフォーメーション）や働き方改革など、管理職のリーディングが求められる課題が山積し、これまでの「あたり前」を見直していかなければ、それらの課題に取り組んでいくことが難しいと感じられていることの表れではないかと考えられます。

また、中央教育審議会で現在、議論が進められている学習指導要領の次期改訂に関する論点整理では、「子どものより主体的な社会参画にかかわる教育の改善」が挙げられ、ルールメイキングなど、生徒にも「あたり前」を見直す力が求められています。

そこで今号の特集では、教師や生徒が自校の見直すべき「あたり前」にどうすれば気づき、それを見直すことができるのかについて考えてまいります。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.4 課題整理

育てたい生徒像を明確にすることが、「あたり前」を見直す鍵に
東京都公立小中一貫校管理職、一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所
認定トレーナー、星槎大学大学院客員研究員 もき まさひろ 茂木正浩

P.8 事例1 業務負担の軽減／持続可能な探究学習

長野県野沢北高校

現場の問題意識に耳を傾けて課題を発見し、
若手・中堅の教師が中心となって取り組む

P.11 事例2 教師の勤務形態／部活動の実施形態

愛知県・私立滝中学校・滝高校

株式会社を設立し、勤務時間外の業務を委託。
有志の教師の労働環境を守りつつ、生徒の意欲に応える

P.14 事例3 業務負担の軽減

兵庫県・私立滝川中学校・高校

ICTを活用し、出欠や成績のデータを一元管理。
校務負担の軽減と指導の充実を図る

P.17 事例4 校則の見直し

せんまや 岩手県立千厩高校

生徒主体の校則の見直しを通して、
「自分たちが学校をつくる」意識を高め、行動を促す

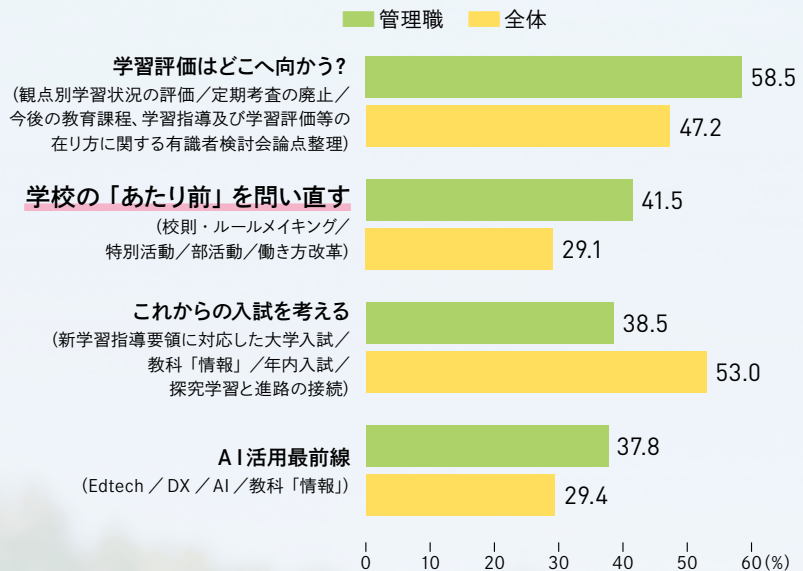
P.20 Column

教師だからできる、
生徒の「あたり前」の見直しへの伴走
認定特定非営利活動法人カタリバ まいこ 藤本雅衣子

※1 今年度も本アンケートを実施いたします。今号の裏表紙裏の「off Shot」の下に掲載している「アンケートのご協力をお願い」をご覧ください、アンケートへのご協力をお願いいたします。

学校の「あたり前」に対する 教師の課題感

図1 2025年度の『VIEW next』高校版で取り上げてほしいテーマを教えてください。



注1：複数回答。管理職の回答の上位4項目を掲載。

注2：() 内の語句は、テーマに関連する教育課題・動向。

※『VIEW next』高校版「2025年度の誌面に関する読者アンケート」(24年10～11月に実施。回答数881)を基に編集部で作成。

*今年度も本アンケートを実施いたします。今号の裏表紙裏の「off Shot」の下に掲載している「アンケートのご協力をお願い」をご覧ください、アンケートへのご協力をお願いいたします。

図2 「学校の『あたり前』を問い直す(校則・ルールメイキング/特別活動/部活動/働き方改革)」というテーマにおいて、どのような課題感を持っていますか。

- 「あたり前」を問い直すことは、多くの学校現場が直面している課題だ。働き方改革では「働きやすさ」が目玉だが、「働きがい」とのバランスが重要だと感じている。(公立・管理職)
- 過去の実績や経験を重視する傾向が強い教師が多い。新しい取り組みを始めることに抵抗感があるからだろう。「あたり前」の見直しは、時にはトップダウンでやるべきだと思う。(公立・管理職)
- 教師が実施の目的を説明することができない学校行事が前年踏襲で続いていたり、効率的な代替手段があるにもかかわらず、従前の手段が好まれたりしている。その風潮を何とか変えたい。(公立・学年主任)
- 社会が変化していく中で、学校だけが「これまで通り」というわけにはいかない。それでは学校というシステムが持続不可能だと考える。(私立・管理職)

※『VIEW next』高校版「2025年度の誌面に関する読者アンケート」の結果や高校への取材で得られた声を基に編集部で作成。

あ

「あたり前」になっていることには見通しを持って取り組むことができ、安定した結果が得られやすい一方で、形骸化や停滞を招きやすい面もある。学校現場からは、「『これまで通り』というわけにはいかない」という声が上がりがながらも、「新しい取り組みを始めることに抵抗感がある」「実施の目的を説明することができない学校行事が前年踏襲で続いている」とい

先生方とともに
考えたい「問い」

自校の見直すべき「あたり前」に、どうすれば
気づき、それを見直すことができるのか。

った声もある。「あたり前」を見直す必要性を感じつつも、現状を変えられないジレンマがつかがえる(図2)。「あたり前」であるが故に見通しがちなことに

どうすれば気づくことができ、固定観念にとらわれずに現状の課題を見いだして、よりよい教育活動を実現していけるのかについて考えていく。

育てたい生徒像を明確にすることが、 「あたり前」を見直す鍵に

変化の激しい時代に対応し、よりよい教育活動の実現が求められる中、
学校において、これまでの「あたり前」を見直すためには、
どのような視点が必要となるのか。

『子どもの可能性を狭めているかも？ 先生のための「つい…」の
決めつけをほぐす練習』(明治図書出版)の著者で、
公立小中一貫校の管理職を務める茂木正浩先生に、
VIEW next 編集部統括責任者の柏木崇が聞いた。



VIEWnext 編集部
統括責任者
柏木 崇

東京都公立小中一貫校管理職
一般社団法人アンコンシャスバイアス
研究所認定トレーナー
星槎大学大学院客員研究員
茂木正浩



人が陥りやすい「決めつけ」や「思い込み」に気づくために

柏木 先生はご著書の中で、人が陥りやすい「決めつけ」や「思い込み」に気づき、人や物事に対する見方を変えるためのヒントを紹介しています。先生ご自身は、どのような経験や考え方を通じて、固定観念にとらわれない柔軟な見方を培ってきたのでしょうか。

茂木 私は長年、社会科の授業研究に力を入れていて、プライベートの時間も削って仕事に打ち込んでいました。40代に入ると自分の世界を広げたいと思い、民間が主催する教員研修に参加しました。そこで知り合った教師や講師と連絡を取るためにSNSを使い始めたところ、全国の先生方の様々な活動を知り、視野が広がりました。自分を高めようと読書の分野を変えたり、他業種の人と出会う場に参加したりする中で、今までとは違う情報に触れるようになり、自分の働き方や学校の活動に疑問を持つようになりました。

柏木 多様な人たちとの交流を通じて、ものの見方や考え方が変わっていったんですね。

茂木 その後、決めつけや思い込みをなくすための見方・考え方を学ぶセミナーに参加しました。そのセミナーで

は、日常生活で自分が無意識に決めつけていることを探すワークなどを経験しました。セミナー後も、ほかの見方がないかを考え、1つの情報に縛られないことを意識するようになりました。例えば、廊下を走っている子どもを見かけると、以前はきつい口調で「走っては駄目!」と一方的に注意していましたが、今は子どもに、「なぜ、走っていたの?」と聞くようになりました。何か急ぐ理由があったのかもしれないと考えようになったからです。

柏木 先生ご自身が「決めつけない」という姿勢を持つことで、学校においてどのような「あたり前」を見直してきたのでしょうか。

茂木 勤務校では毎年、マラソン大会を実施しています。以前から近隣の公園のマラソンコースを使っていたが、コースが狭いため、子どものみの参加でした。頑張っている子どもの姿を大勢の人に見てもらえないかと考え、体育主任と検討し、昨年度、ゴールを校庭に変更しました。マラソン大会は体力の向上に加えて、忍耐力や粘り強さの育成といった目的もあります。子どもがそれらの力を発揮するためには、保護者や仲間の応援が重要になると考え、コースを見直し、大勢が集まることのできる校庭をゴールにしました。



茂木正浩（もぎ・まさひろ）大学卒業後、民間企業に3年間勤務。通信制大学で小学校教諭免許を取得して小学校教員となり、学年主任や各分掌の主任を担当。自費で大学院に進学し、教育学修士号を取得。一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所認定トレーナー、一般財団法人日本ペップトーク普及協会認定講師なども務め、オモロー授業発表会関東の運営などにも携わる。著書に、『子どもの可能性を狭めているかも？ 先生のための「つい…」の決めつけをほぐす練習』（明治図書出版）。

「あたり前」の見直しを難しくさせている学校特有の環境

柏木 慣習化している業務や活動を変えるのはなかなか難しいといった話も先生方から聞きます。なぜ、「あたり前」を見直すことは難しいのでしょうか。

茂木 理由の1つとして考えられるのが、学校特有の環境です。まず、年間の活動計画が毎年ほぼ同じという点です。活動の見通しが持てる、ノウハウが蓄積されるといった利点はありますが、一方で、活動の目的を考えなくても実施できるようにすると、実施すること自体が目的となってしまうがちです。

また、学校は基本的に、年齢や発達段階の近い子どもが集まる場です。そ

のような均質性が高い子どもの集団の中にいることで、よくも悪くも教師は似た価値観を持つようになり、既存の枠組みを疑うといった視点が持ちづらくなってしまう。そして、高校では、他教科の取り組みに干渉しないといった文化もあると思います。そうしたことが「あたり前」の見直しを難しくさせていると考えられます。

柏木 「あたり前」の見直しが難しい環境にあっても、なぜ今、学校は「あたり前」を見直す必要があるのでしょうか。

茂木 学校は生徒の未来のためにある場所だからです。未来の社会を生きる生徒にどのような資質・能力を育むのか、そのために、どういった教育活動

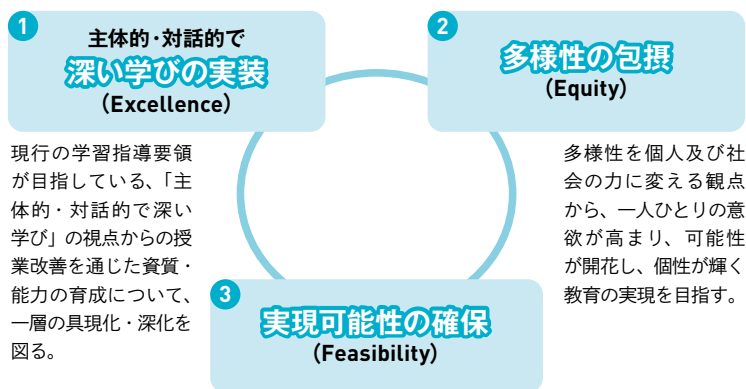
が必要なのかを第一に考えるべきであり、漫然と前例を踏襲することや根拠のない決めつけは、よりよい教育活動を妨げる大きな要因になります。

教育動向と照らし合わせて言えば、中央教育審議会の教育課程企画特別部会では現在、学習指導要領の次期改訂について議論されていますが、次期改訂では、子どもを画一的に捉えず、一人ひとりの個性が輝く教育を実現するために、教育課程の編成において学校の裁量が拡大する見込みです。

学校が自校の生徒にとって最適な教育課程を編成するためには、既存の枠にとらわれずに教育活動を考えること、すなわち「あたり前」を見直す視点が重要になると考えます。

柏木 次期改訂の議論では、現行の学習指導要領が実現を目指している、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通じた資質・能力について、一層の具現化・深化を図ることも方向性の1つに挙げられています。その「主体的・対話的で深い学び」の実装も、柔軟な教育課程の

図1 学習指導要領の次期改訂の議論を貫く3つの方向性



現行の学習指導要領が目指している、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通じた資質・能力の育成について、一層の具現化・深化を図る。

多様性を個人及び社会の力に変える観点から、一人ひとりの意欲が高まり、可能性が開花し、個性が輝く教育の実現を目指す。

デジタル学習基盤のさらなる充実、教科書や教材、指導書の改善、必要な設備の整備、総合的な勤務環境整備とも相まって審議全体に通底させるべき方向性。

※中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」（2025年9月）を基に編集部で作成。

編成も、それらを実現するのは現場の先生方であり、3つめの方向性として「実現可能性の確保」が示されています（図1）。

教育活動の改善を持続可能なものにしていくためにも、茂木先生がかつて「今の働き方でよいのだろうか」と疑問を持ったように、教師一人ひとりが「あたり前」を見直すことができるようになることが大切なのだ、先生のお話を聞いて改めて思いました。

図2 子どものより主体的に社会参画にかかわる教育に関する課題

1 教育内容面の課題

- 選挙権年齢の引き下げに伴い、高校教育において特に大きな改善を図ったが、さらなる取り組みの余地がある。また、中学校において校則見直しなどの取り組みが進む一方、子どものかわりが十分でない例が見られるほか、小学校においても、学校運営上の様々な場面において、子どもの主体的な参画の余地が大きい
- 小・中・高を通じて、GIGAスクール構想で整備されたクラウド環境を生かして、意見を可視化したり、少数意見を吟味したりして、よりよい合意を実現する取り組みが進みつつあるが、道半ば
- 我が国の学校教育の長所であるはずの協調性の涵養が、ともすれば集団性の強調に陥り、子どもにとって意義が不明確な校則や学級ルールなどの存在とも相まって、「同調圧力」への偏りを生んでいる側面も指摘されている。また、意見表明の機会の確保や対話や協働を通じた参画の機会は、多様性を包摂する教育の実現にとっても重要であるが、十分に整備されているとは言えない

2 学校・社会の受け皿などの課題

- 子どもの意見を授業や教育課程に生かす仕組みや、その際の指導技術などが未成熟という課題もある
 - 子どもを社会の一員として受け止め、その意見を政策や社会の仕組みづくりに生かす地域・社会の受け皿が不足している
- 総じて、子どもたちにとって身近な社会である学級・学校をフィールドにして、意見表明の機会、合意形成の機会、参画の機会をより充実させる余地があるものと考えられる。そのために、学習指導要領において関連する教育内容を適切に盛り込むとともに、教員研修も含め、必要な条件整備を図る必要がある

※中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」（2025年9月）を基に編集部で作成。

生徒の「あたり前」を見直す力を育むために教師がすべきこと

柏木 次期改訂の論点整理では、「子どものより主体的な社会参画にかかわる教育の改善」(図2)が挙げられ、言わば生徒も「あたり前」を見直す力が必要だと示されているように思えます。そうした力を生徒が身につけるためには、教師には何が求められるでしょうか。

茂木 教師から一方的に与えられるだけでは、「あたり前」を見直す意識や社会参画の意識は生徒に芽生えないと思います。私は「生徒が持つ力はこれだ・ここまでだ」とは決めつけずに、何事も任せることが大切だと考えています。任せると言っても、「放任する」わけではありません。活動の目的や進め方について教師と生徒が対話し、合意形成を図ることが不可欠です。その過程

で、生徒は当事者意識を持ち、主体的に活動に取り組むようになります。仮に失敗したとしても、それはくじけない力や立ち直る力といった非認知能力が育つ機会になります。教師の役割は、そうした場面で生徒に寄り添い、対話を通じて再度挑戦を促すような支援をすることではないでしょうか。

知人の校長は、「この学校をつくっていくのは君たちだよ」と繰り返し子どもに伝えていたそうです。子どもが「自分たちが学校をつくるんだ」と強い意識を持てば、「自分たちの学校の何が課題か」と、自ら考え始めるはずですよ。

目的や成果、効率性の視点を持つことで「あたり前」を見直す

柏木 ここまでの話でもいくつか出てきましたが、どのような視点を持っていれば、見直すべき「あたり前」に気づけるようになるでしょうか。

茂木 取り組みや活動、仕組み・制度が、①目的に合っているか、②目的に応じた成果を出しているか、③効率的に進められているか、④時代の要請を踏まえているか、⑤生徒が主語であるかといった視点を持つことができていくと、見直すべき「あたり前」に気づきやすくなると思います(図3)。それら

の視点で授業や学校行事、分掌業務などを見ると、改善すべき点を見いだすことができるのではないのでしょうか。

柏木 本誌の読者モニターアンケートで、教師自身や学校が見直した「あたり前」について尋ねたところ、様々な回答が寄せられました(図4)。例えば、「遅くまで職員室に残って仕事をする」とが「よし」とされる風潮」を見直すことができた要因は何だと思いますか。

茂木 次の日もしっかりと生徒に向き合うために、段取りや時間配分などを考えて効率的に仕事を進め、自分や家族との時間も大切にするという意識の転換を多くの教師ができたからではないでしょうか。

柏木 目的や時代の要請を考えた視野の広い働き方が大切ですね。資料のペーパーレス化なども、進んでいる学校とそうでない学校があるようです。**茂木** 資料の用途を踏まえて、紙かデジタルかの使い分けが重要だと思います。一覧で見たい、壁に貼っておきたい場合もあります。どちらがより効率的かを考えるとよいと思います。

柏木 服装や校則に関する見直しにおいて留意すべき点はありますか。**茂木** 生徒の意見を聞くことが何よりも重要です。まさに生徒が主語の教育

図4 本誌読者モニターから寄せられた、見直した「あたり前」の例

- ・遅くまで職員室に残り、仕事をやっている感を出すことをやめた。(公立)
- ・通知表や生徒指導要録の手書きをやめ、デジタル化。授業の課題や資料なども、紙ではなくデジタルで配信。(私立)
- ・テストの採点にICTを活用した。業務の効率化が図られ、結果分析に時間を割くことができたようになった。(公立)
- ・朝の全体の打ち合わせを廃止した。(公立)
- ・職員室を固定席とせず、フリーデスク化した。(公立)
- ・教師による現金徴収をやめ、銀行振り込みを導入した。(公立)
- ・「総合的な探究の時間」の授業時間を45分間にし、夏季休業の短縮などをして、金曜日の午後を「金探」と称して探究学習の時間にした。学校外の活動も奨励。(公立)
- ・生徒自身が写真を撮影することができる時代であることを踏まえて、卒業アルバムのページ数を調整した。(公立)
- ・部活動の目標を、顧問ではなく、生徒が設定し、その達成に向けた計画も生徒が立てるようにした。(公立)
- ・学校のルールは社会のルールと同一と定め、学校独自の校則を撤廃した。(公立)
- ・頭髪、身だしなみの厳しい指導をやめた。(公立)
- ・夏服・冬服の衣替えを廃止。好きな時に夏服・冬服を選べるようにした。(公立)
- ・生徒会の取り組みにより、冬季の部活動終了後のウインドブレーカーやジャージでの下校を認めることとした。(私立)

※『VIEW next』高校版読者モニターアンケート結果より（アンケートは2025年10月にウェブで実施。有効回答数は115）。

図3 見直すべき「あたり前」に気づくための視点

視点1 ● 目的に合っているか

- ☒ 目的を達成できる取り組みや仕組みか。
- ☒ 実施することが目的になってしまっていないか。

視点2 ● 目的に応じた成果を出しているか

- ☒ 目的を達成する成果が出ているか。
- ☒ 費やした時間や労力に見合う成果が得られているか。
- ☒ 取り組みが自己満足に終わっていないか。

視点3 ● 効率的に進められているか

- ☒ 慣習として続けている非効率な手順はないか。
- ☒ 省略できるステップはないか。
- ☒ ICTを活用することで、自動化・代替できる部分はないか。

視点4 ● 時代の要請を踏まえているか

- ☒ 社会や技術の変化によって、取り組みや仕組み自体が「時代遅れ」になっていないか。
- ☒ オンライン化やAIの活用などを取り入れることで、取り組みや仕組みの質の向上、新たな価値の創出ができないか。

視点5 ● 生徒が主語であるか

- ☒ 生徒のニーズや実態に合っているか。
- ☒ 生徒にとって、その活動にどれだけの学習的・精神的な価値があるか。
- ☒ 学校の都合のみに依拠した活動になっていないか。

※取材を基に編集部で作成。

を行う機会となります。

柏木 ①目的に合っているか、②目的

に応じた成果を出しているかを検証するには、振り返りが重要になります。本誌の読者モニターアンケートには、「あたり前」を見直すことができない要因として「振り返りの機会が少ない」といった声も多く寄せられました。

茂木 振り返りが不十分なのは、忙しさに加え、効果検証のノウハウ不足も考えられます。例えば、学校満足度調査を実施しても、その結果を具体的な改善につなげられるほどの分析ができないケースは少なくないと思います。

管理職こそ、 未来の社会に目を向ける

柏木 「あたり前」を見直すことができる教師集団を形成するために、管理職には何が求められるでしょうか。

茂木 教師のウェルビーイングを本人だけの問題として捉えるのではなく、組織全体で高めていくことが重要で

す。心に余裕がなければ改善につながるような振り返りはできませんし、生徒が主語の教育をしようという意欲も湧いてきません。多忙感の解消のために、教師一人ひとりの適性や専門性、業務負担などを見極め、できる限り不公平感がないように仕事を割りあてることが、管理職の大切な仕事です。

今後は未来の社会に目を向けることが、管理職には一層求められるようになるでしょう。教育の不易を守りつつも、社会の変化に対応した教育を行っていくことが重要ですが、そうした教育を「やってみよう」と前向きに納得できる言葉で現場の教師に伝えるためには、管理職自身が未来の社会を見据えている必要があるからです。

そして管理職に限らず、教師は「こういう生徒を育てたい」という思いを持ち、同僚と語り合うことが何よりも大切になります。それは不断に、そしてしなやかに「あたり前」を見直して、よりよい教育を実現するためにも必要なことではないでしょうか。

次ページからは、4校の実践を紹介する。業務負担の軽減や持続可能な探究学習、教師の勤務形態、部活動の実施形態、校則の見直しといった課題を前に、各校はそれまでの「あたり前」をどのように見直していったのか、その過程を見ていく。



業務負担の軽減／ 持続可能な探究学習

現場の問題意識に耳を傾けて課題を発見し、 若手・中堅の教師が中心となって取り組む 長野県野沢北高校

長野県野沢北高校は、定期考査などの採点においてICTを活用することで、採点業務にかかる教師の負担を大幅に削減した。また、現在では多くの学校が取り組む探究学習に、同校は10年以上前から全校体制で取り組むことを模索し、実践を積み重ねてきた。そのいずれもがトップダウンによるものではなく、現場の教師の問題意識から始まった取り組みであり、時間をかけて教師一人ひとりの意識変容を促す改革だった。

かつての同校で「あたり前」だったこと

- 1 定期考査などの採点は手作業で行う業務。
- 2 ペーパーテストで測れる資質・能力を、育成を目指す資質・能力の中心に据える。

「あたり前」を見直した経緯・きっかけ

- 1 採点業務の負担を軽減したいと考えた教師が率先してICTを活用した採点を行い、成果を校内に周知した。
- 2 全教師へのアンケートで、生徒に育成したい資質・能力や、探究学習の実施に向けた不安などを聞いた。

見直しの成果・今後の展望

- 1 自動採点システムの導入により、採点業務の時間が3分の1程度までに削減。成績データの活用による生徒の学習改善・教師の指導改善も進んだ。
- 2 全校体制で探究学習を推進する仕組みを構築し、現場の声を反映した指導改善を模索し続けている。

自動採点システムの導入で 採点業務の負担が軽減

長野県野沢北高校は、2023年度からICTを活用した自動採点システム（＊）を導入し、定期考査などの採点業務にかかる教師の負担の軽減を図っている。教師が採点に費やす時間は、導入以前と比べると3分の1程度までに削減された。

自動採点システムの導入のきっかけをつくったのは柳沢敬校長だ。解答用紙をスキャナーで読み取り、システム上で正誤判断・採点・自動集計することで、採点業務に割く時間を大幅に減らした自治体の取り組みを紹介した全国紙の記事を職員に回覧した。22年5

月のことだ。

「教師の仕事の中で、効率化できる可能性が残っているうちの1つが採点業務だと思っていました。県内にはそうした採点システムを導入している学校はありませんでしたが、本校がICTを活用した自動採点システムの運用の先駆けとなり、それを他校にも広めることができれば、県全体の働き方改革に貢献できるのではないかと考えました」

その記事に反応した教師の1人が、理科科主任の赤羽根弦先生だった。

「採点業務にかかる時間を減らし、それによって生まれる時間を教材研究などに充てたいと日頃から考えていたので、すぐに校長に『システムを開発

＊ 大日本印刷株式会社が提供するサービス「リアテンドント」。

どうすれば**見直**せる？学校の「あたり前」

学校概要

設立 1901（明治34）年
形態 全日制／普通科・理数科／共学
生徒数 1学年約200人
2024年度卒業生進路実績 公立大は、北海道大、筑波大、群馬大、埼玉大、千葉大、東京学芸大、横浜国立大、金沢大、信州大、名古屋大、大阪大、熊本大などに82人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、中央大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ286人が合格。



探究主任
澤田浩文
 さわだ・ひろふみ
 同校に赴任して10年目。国語科。



理数科主任
赤羽根 弦
 あかばね・けん
 同校に赴任して5年目。理科（生物）。



教頭
田中 聡
 たなか・さとし
 同校に赴任して2年目。



校長
柳沢 敬
 やなぎさわ・けい
 同校に赴任して4年目。

した企業に話を聞いてみたい」と相談しました。夏季休業期間中に企業担当者を本校に招き、説明を聞きました」

そして23年4月から自動採点システムの運用が始まった。だが、設定に手間がかかること、採点の正確性に対する不安が拭い切れないことを理由に、積極的に使用するのはい部の教師に限られていた。しかし、赤羽根先生が採点業務を短時間でトラブルもなく終える様子を見た他の教師が関心を示し始め、設定方法などを赤羽根先生に尋ねるようになった。

2年目には、校内に知見が蓄積され、赤羽根先生以外にも自動採点システムの利点を体験を交えて同僚に説明できる教師が増えた。さらに、システムそのものの改善が進んだことで、担当教科の定期考査の採点業務で同システムを利用する教師は増加した。導入3年目の25年度は、ほぼすべての教師が同システムを利用している。

採点業務にかかる教師の負担の軽減が進んだだけでなく、成績情報をデジタル管理することで、生徒の学習改善や教師の指導改善が進んだ。

「導入した自動採点システムでは、生徒一人ひとりの解答状況を設問別に分析し、同じ点数の生徒でも理解度が異なることを客観的に把握することが

図 ある科目のテストでの生徒の理解度分析表の例

① 番	② 得点	理解度ランク所属確率					③ 理解度
		Eランク	Dランク	Cランク	Bランク	Aランク	
82					8.7%	91.3%	A
72					19.6%	80.3%	A
67					22.0%	77.5%	A
65				10.7%	85.0%	4.2%	B
64					7.3%	92.2%	A
64				6.8%	79.0%	14.2%	B
57			1.4%	20.9%	73.8%	3.9%	B
55			9.8%	84.6%	5.4%		C
55			8.9%	65.1%	25.4%		C

① 生徒をテストの得点順で表示。

② テスト問題への理解度をAからEの5ランクに分け、解答状況を基に、生徒がどのランクに該当する可能性があるかを表示。

③ 理解度でのランクづけを得点と見比べることで、得点は低い理解度が高い生徒などを発見できる。

※学校資料を基に編集部で作成。

できます（図）。定期考査の結果を返却する際、優先的に復習すべき問題を生徒ごとに提示することも容易になりました。今後は、提供企業との協働研究の成果もシステムに反映される予定です」（赤羽根先生）

5段階で把握した生徒の理解度に応じてグループワークの際の班分けを行うなど、自動採点システムによるデータ

分析の結果を日々の授業改善に生かすことも可能になった。さらに、1問ごとの正誤状況や誤答の傾向などを分析できるようになったため、自校の生徒の学力を把握する上で適切な作問ができていくかも確認できるようになった。

「自動採点システムを導入した学校の中には、自動採点がしやすくなるように定期考査から記述式問題をなくした学校もあると聞きました。採点業務にかかる教師の負担の軽減を優先するがあり、生徒の希望進路の実現に必要な学力の育成がおろそかになってしまつてはいけません。新しいことを取り入れる過程では、本質を見誤っていないかを入念に確認しなければならな

持続可能な探究学習の仕組みを3年間かけてつくる

同校では、全教師が参画して探究学習を進める体制を17年度から構築している。その最初の一步は、14年度に実施された教職員対象のアンケートだった。探究主任の澤田浩文先生は説明する。

「本校の未来のあり方を考えるために設置された将来構想委員会が、教職員に対して、生徒に身につけさせたい

力について尋ねるアンケートを実施しました。その結果、難関大学の一般選抜で多くの生徒を合格させてきた本校においても、ペーパーテストだけでは測れない資質・能力、具体的には論理的に考える力や自分の意見を他者に伝える力、異なる立場の人を思いやる力などが重視されていることが分かりました。また、そうした力を育成する教育活動として、生徒が主体となって取り組む探究学習を想定していることも分かりました」

一方で同アンケートには、探究学習に関する業務が一部の教師に集中する他校の例を挙げて、探究学習にかかわることに躊躇する率直な声もあった。全教師が無理なく探究学習にかかわりながら、資質・能力を育成する仕組みが必要なことも同校は認識した。

その後、将来構想委員会のメンバーの教師が率先して探究的な授業を実践し、校内に公開。探究学習への期待や不安について教師たちが語り合える場も継続的につくっていった。そして、自校の探究学習の理念と生徒の活動への教師のかかわり方などを示したガイドブックの作成を開始した。

全校体制での探究学習をスタートしたのは、同アンケートの実施から3年後の17年度だ。

「探究学習は、授業の流れや指導のノウハウの共有以上に、なぜ探究学習が必要なのか、教師にはどのようなかわりが求められるかといった理念の浸透が重要です。性急に探究学習を導入するのではなく、探究学習に意欲的な教師が授業を率先して行い、ほかの教師に見てもらうことを通じて、言葉だけでは伝わりにくい理念を広め、『自分も取り組んでみたい』という期待感を高めていきました」(澤田先生)

全校体制での実施から9年目を迎えた同校の探究学習は、様々な点でブラッシュアップを続けている。

24年度からは、入学直後の1年生が4月に丸1日をかけて探究学習に取り組む、「ミニ探究day」を実施しているが、それは探究学習に対する教師たちの問題意識から始まった、「あたり前」を見直す取り組みの1つだ。

「本校では1年次に探究学習の基礎を学び、2年次から本格的に実践に取り組みますが、2年次の探究学習を充実したものにするためには、1年次に探究学習のサイクルを経験させた方がよいのではないかと聞いた声が同僚から上がりました。そこで、課題の設定からまとめ・発表までを『ミニ探究day』で経験した上で、何を改善するのよいかを振り返ることで、探究学習

についての理解が深まるようにしました」(澤田先生)

同校は地域の企業や大学などとコンソーシアムを形成しており、約30人の社会人が外部サポーターとして生徒の探究学習に伴走している。外部サポーターが参加することで、探究学習に伴走する教師の負担が減った一方で、外部サポーターとの折衝など、新たな業務も生まれている。同校では、そうした業務を担う教師の授業時数を減らすなどして、探究学習を持続可能な教育活動にしている。

自校の課題を見つけ、それに取り組める教師を見極める

同校では、教育課程や授業評価の検討委員会、将来構想委員会の委員長を若手・中堅の教師が務めている。そうした教師が議論の中心となり、学校を代表して他校視察などに出かけることの重要性を田中聡(となか ともとし)教頭は語る。

「若手の教師が現状への疑問や改善のアイデアを忌憚なく述べ、それらをベテランの教師が受け止める風土が本校にはあります。自動採点システムの導入・運用も全校体制での探究学習も、若手・中堅の教師がリードしながら進めてきました。社会が大きく変化する

中、これまでのあり方にとらわれず、チャレンジを楽しむ姿勢は、次代を担う生徒だけでなく、私たち教師にも求められていると思います」

田中教頭は、同校の若手の教師たちが終業後のちょっとした時間に、これからの学校のあり方について語り合う様子を見ると、高校教育に未来と希望を感じるといふ。

「働き方改革としては早く帰宅することが大切ですが、教師としての成長には、教師同士の対話の時間が間違いなく必要です」(田中教頭)

柳沢校長は、管理職の責務として「若手・中堅の教師が自校での勤務を経て、今後、現場でどんな活躍をする人材となりそうかをイメージすること」の重要性を語る。

「教師一人ひとりの潜在能力や興味・関心が分かると、学校の課題に取り組むリーダーを見つけやすくなります。自動採点システムも、校長の私がトップダウンで指示を出すのではなく、赤羽根先生が興味を持ち、率先して動いたからこそ、ほかの教師に波及し、学校全体の変化につながったのだと思います。学校を変えるためには、学校の中の課題を見つけられる人、その課題に取り組める人を管理職が見極め、支援することが大切だと思います」

事例 2

教師の勤務形態／
部活動の実施形態

かつての同校で「あたり前」だったこと

- ① 教師は勤務時間外でも生徒の意欲に応じて指導。
- ② 職員会議で合意形成してから物事を進める。

「あたり前」を見直した経緯・きっかけ

- ① 生徒の思いを尊重しつつ、勤務時間外の学習指導や休業日の部活動の指導を業務委託する仕組みとして、株式会社の設立を発案。
- ② 学校経営上の事案は経営者の判断で見直しや変更を進め、素早く対応。

見直しの成果・今後の展望

- ① 勤務時間内に業務が終わるよう、工夫して効率的に業務を進めるようになり、多くの教師が定時で退勤できている。
- ② 現場の教師が「小さな経営感覚」を持ち、変化に柔軟に対応するようになった。

勤務時間外に教師と生徒が学ぶ場をつくるため、株式会社を設立

愛知県・私立滝中学校・滝高校は2016年度、株式会社滝教育研究所を設立し、2016年9月、生徒によりよい教育を提供するため、株式会社滝教育研究所を設立した。現在、同校の教師は同研究所で、勤務時間外の学習講座や休業日の部活動の指導を業務委託で行っており、教師の適正な労働環境の整備にもつながっている（P.12図1・2）。

同研究所は、14年度に始まった創立100周年に向けて自校の教育のあり方を考える委員会での議論を発端に設立された。ベテラン教師の委員の1人が、「昔は生徒も教師も学校の近くに住んでいたため、放課後は教師の自宅

で生徒に勉強を教える『家庭補習』を行っていた。生徒と教師の距離が近く、成果も上げていた」と話したところ、若手の教師から「自分たちも『家庭補習』のようなことをやってみたい」という声が上がった。

また、当時は高校3年生が放課後や休業日に自主勉強会を開いていた。下校時刻以降や休業日は公共施設を利用して生徒同士が教え合い、切磋琢磨していた。自主勉強会は後輩に引き継がれていったが、15年度には公共施設を使用できなくなった。生徒は休業日だけでなく学校の教室を使うようにできないか学校に相談したが、教師は休日出勤となるため、協力できるかは不透明だった。その状況を聞いた学校は、

株式会社を設立し、勤務時間外の業務を委託。
有志の教師の労働環境を守りつつ、生徒の意欲に応える
愛知県・私立滝中学校・滝高校

愛知県・私立滝中学校・滝高校は2016年度、株式会社滝教育研究所を設立し、学校の勤務時間外の学習指導や休業日の部活動の指導を業務委託する仕組みを整えた。当初は教師からも、教育機関が株式会社を運営することへの反発もあったが、今では教育活動の可能性を広げる、同校にとって不可欠な存在となっている。一連の活動を通じて、教師の働き方や学校経営に対する意識改革も進んでいる。

* 滝教育研究所の設立・運営を始めとする同校の取り組みは、2025年7月1日に実施した『VIEW next』高校版2025年4月号 特集テーマ運動オンラインセミナーでも紹介しました。同セミナーのアーカイブ動画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「ウェブオリジナル記事」(<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article32854/>)、または右の2次元コードからアクセスしてください。



何とか生徒の思いに応えられるよう考えた、当時校長を務めていた中島政彦副理事長は語る。

「教師が『家庭補習』のような仕組みをつくりたいと思い、生徒は放課後や休業日に仲間と学習できる場所を探していました。そこで、教師の勤務時間外に、学校以外の場所で、生徒と教師や生徒同士が切磋琢磨できる場所をつくるというアイデアが生まれました。そのような場をどうしたらつくれるのかを考えあぐねていたところ、理事長から



副理事長、学園長
中島政彦
なかしま まさひこ
同校に赴任して50年目。



労働組合委員長
秋田陽哉
あきた しょうや
同校に赴任して14年目。
国語科。滝教育研究所講師。

学校概要

設立 1926（大正15）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 高校1学年約370人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、東京大、岐阜大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに166人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大、愛知医科大、南山大、同志社大、立命館大などに延べ522人が合格。

図1 滝教育研究所の主な活動内容

講座部門

- 開講を希望した同校の教師等による学習講座
研究所が設定した基礎講座、教師が設定した大学入試対策講座、同校卒業生によるAIの活用講座など。
- セミナー室、自習室の提供
生徒・教師が放課後や休業日に利用可能。

【講座の設置数・受講者数】

年度	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
講座数	28	37	37	32	36	42	31
受講者数	353	577	617	532	627	662	577

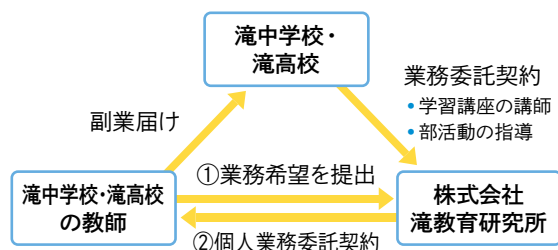
25年度は44講座を開講。受講者数は延べ人数。

クラブ活動部門

- 休業日の部活動の運営（図3参照）

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 滝教育研究所と同校との業務委託の仕組み



※学校資料を基に編集部で作成。

た（図1）。労働組合委員長を務める秋田陽哉先生は、次のように語る。

「生徒も参加は任意であり、学習意欲の高い生徒が参加しています。私も学習講座を担当していますが、生徒の学びたいという思いを肌で感じることで、教師も意欲的になり、講座数が増えていきました。加えて、研究所のことが新聞記事に取り上げられ、多くの学校が視察に訪れるようになりました。外部から注目されている仕組みだと校内に周知されると、反発の声は小さくなっていました」

休業日の部活動の指導も 研究所に業務委託

同研究所によって、部活動の指導形態も転換された。

同校は17年3月に、労働基準監督署の聞き取りを受けたことから、労働基準法に合うように就業規則等の変更、労働組合との取り決めの見直しを行った。その時に大きな課題となったのが休業日の部活動だった。登校日の部活動は終了時刻を生徒の下校時刻の17時30分とするので教師の勤務時間内に収まるが、休業日の部活動は勤務時間外となる。しかし、生徒や教師からは、土日にも部活動をやりたいという声が

図3 滝教育研究所を活用した部活動の運営形態

■形態

- ・学校での勤務時間内の部活動を「A活動」、勤務時間外の部活動を「B活動」に分ける。
- ・「A活動」は業務として顧問を決定。「B活動」は顧問の意思で実施するかしないかを決定。実施する場合、顧問は滝教育研究所と個人業務委託契約を結ぶ。

■活動時間

- ・A活動：終礼後から下校時刻の17時30分まで（実質の活動時間は、月・水・木は45分間、火・金は1時間45分）。
- ・B活動：公式大会等への参加を含め、上限は年間60日。1日あたりの活動は上限3時間、土日はどちらか1日。公式大会は1日上限6時間とし、土日連続も可。
- ・朝練習は原則認めない。

■費用

- ・部の活動費はそれぞれの部で徴収。
- ・「B活動」を行う生徒は滝教育研究所に登録費（学期ごとに2,000円、年間6,000円）を収める（なお、それまで部活動の活動費に充てていたPTA会費を年間9,600円から年間3,000円に減額）。
- ・顧問には、「B活動」の指導料を研究所から支給。

■事故やケガ等への対応

- ・生徒の事故やケガ等は、独立行政法人日本スポーツ振興センターによる災害共済給付制度で対応。
- ・「B活動」を実施する顧問は、業務災害補償保険に加入。

※学校資料を基に編集部で作成。

あり、土日に行われる公式大会に対応できる体制も必要だった。

そこで18年度から、学習講座と同様に、休業日の部活動の指導を同研究所に業務委託することにした。具体的には、土日の部活動を実施するかしないかを部活動の顧問が選択できるようにし、実施する場合は同研究所に登録し、顧問の教師は業務委託とした（図3）。

「部活動のかかわり方は、今や生徒や保護者、そして教師が自分で決める時代です。部活動は生徒の人間形成において重要な教育活動の1つですが、唯一の価値観ではありません。部活動をやりたい人・やりたくない人の双方

を尊重する仕組みとして、休業日の部活動は研究所に移管しました」（中島副理事長）

同時に、平日も含む1日の活動時間や、休業日における年間の活動日数の上限も決めた。部活動の時間は以前より少なくなったが、各部が工夫し、効率よく練習するようになった。

「どの部活動も以前と同様か、それ以上の成績を収めています。『強くなるためには長時間の練習が必要』という『あたり前』は過去のものとなりつつあります」（秋田先生）

課題は、顧問が休業日の活動は実施しないことを選択したものの、生徒が

活動を希望した場合の対応だ。現在は外部のコーチを雇用しているが、顧問の代わりのなり手を見つけてるのは難しく、今後も対応策を検討していく。

教師一人ひとりが

小さな経営感覚を持つように

研究所の設立から10年目の今、教えたいた教師と学びたい生徒が出会い、学びを深めていく場を提供する同研究所は、同校にとって不可欠な存在となった。研究所の学習講座の担当教師は学校の授業の担当教師と異なる場合が多いため、生徒が多様な教師と交流できる利点もある。

勤務形態が変わったことで、教師の業務の取り組み方も変わった。秋田先生が所属する国語科では、それまで各教師が別個に行っていた定期考査の作問を、同じ学年の担当者で分担することにして、業務の効率化を図った。

「退勤時刻が決まっていなかった頃は目前意識が強く、仕事にメリハリをつけずに時間も気にせず、細部にまでこだわっていました。今は経験を積み重ねたこともありですが、業務にかかる時間を見通し、空きコマも有効に活用して定時に退勤できるようになりました」（秋田先生）

学校経営に対する教師の意識も変化している。以前は、新しい取り組みを始める場合や既存の取り組みに変更がある場合は、職員会議で合意形成をした上で進めていた。しかしこの10年、研究所の設立や就業規則の変更、さらにはコロナ禍の対応など、理事会や管理職の選択を、教師は自分事として捉えて取り組んできた。それが教師の意識も変えた、秋田先生は語る。

「かつては、よりよい教育活動を実現したいという教師個々の思いを尊重し、合議制を採っていました。しかし、迅速に経営判断をして対応すべき事案が続ぎ、教師は否応なく変化してきました。その経験の積み重ねで、教師は変化に柔軟に対応できるようになるとともに、経営的視点を持つて物事を捉えられるようになりました。今では、発案者が誰であれ、学校がよりよくなるアイデアは、理事会や管理職の判断を経て、教師は主体的にその実現に向けてまい進します。中島副理事長は常々、『小さな経営感覚を持つてくください』と私たちに伝えていますが、それが教師間に根づいてきていると感じています」

同研究所は今後、不登校の生徒の学習場所を提供することを検討している。研究所の存在が教育活動の広がりを後押ししている。

業務負担の軽減

ICTを活用し、出欠や成績のデータを一元管理。
校務負担の軽減と指導の充実を図る

兵庫県・私立滝川中学校・高校

兵庫県・私立滝川中学校・高校は、学校で取り扱う出欠や成績などのデータを、ICTを活用して一元管理できる統合型の校務支援システムを導入した。業務にあたる教師の負担が大幅に軽減され、さらには生徒や保護者との情報共有が密になるなどの変化が見られた。また、一元管理する生徒の様々なデータを活用することで、日々の指導が改善される可能性が高まるなど、想定を超えた成果が得られている。

かつての同校で「あたり前」だったこと

- ① 記入ミスが発生しやすく、チェックの手間もかかるのにもかかわらず、紙の出席簿を使用。
- ② 改修しながら同じ成績管理システムを長年運用。

「あたり前」を見直した経緯・きっかけ

- ① 慣れ親しんだ運用ではあるが、正確性や効率が欠けていることを課題と認識。
- ② 業務の負担も含むトータルのコストを軽減し、生徒のための時間を増やしたいと考えた。

見直しの成果・今後の展望

- ① 出欠などのデータの管理における教師にかかる負担が大幅に軽減し、教師の勤務状況に明らかな改善が見られた。
- ② 生徒に関する様々なデータが一元管理されたことで、生徒把握がより多面的になり、指導改善の可能性が高まった。

校務DXで業務の負担軽減とミス防止を図る

兵庫県・私立滝川中学校・高校は、2025年度から、生徒の出欠管理、成績処理などの様々な校務、教職員間や教師と生徒・保護者間の連絡を一元管理できる統合型の校務支援システムを導入した（※1、図1）。ICTを活用した校務の効率化の中で特に必要性を感じていたのが出欠管理の電子化だったと、学事情報室長の岩本拓也先生は振り返る。

「多くの高校と同様に、本校においてもクラス担任が毎朝出欠を確認し、その結果を出席簿に記入した後は、教科担当の教師が授業ごとに出欠を出席

簿に記入していました。しかし、手作業だとしても記入ミスが発生しますし、インフルエンザなどの理由で出席停止になった生徒が欠席扱いのままになっていることも多々ありました。学期末に担任や教務主任、教科担当の教師が出欠情報を集約し、最終確認するのですが、その作業には相応の時間がかかっていました」

学期末に通知表を見た保護者から、「欠席日数が実際よりも多くカウントされているのではないか」といった問い合わせを受けるなど、生徒や保護者からの信頼を失いかねないミスを防ぐためにも、アナログな仕組みの改修が必要だと考えていたと、学事情報室の田口幸一先生は語る。

※1 滝川中学校・高校は、ベネッセコーポレーションが提供する中高一貫校・併設校を含む高校向け次世代型校務支援サービス「ベネッセ校務クラウド」を活用している。詳細は<https://koumu.benesse.co.jp/>で紹介。

学校概要

設立 1918（大正7）年
形態 全日制／普通科／共生
生徒数 1学年約300人
2024年度卒業生進路実績 国立大は、神戸大、兵庫教育大、岡山大、広島大、九州大、兵庫県立大などに23人が合格。私立大は、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大、関西学院大、甲南大などに延べ339人が合格。



安枝 優介
 教務部
 やすえだ・ゆうすけ
 同校に赴任して12年目。
 数学科。



田口 幸二
 学事情報室
 たぐち・こうじ
 同校に赴任して14年目。
 理科。



小林 ひかり
 進路指導部長
 こばやし・ひかり
 同校に赴任して3年目。
 理科。



岩本 拓也
 学事情報室長
 いわもと・たくや
 同校に赴任して4年目。
 情報科。

「私たち教師にも1人1台の端末が整備されているのですから、ICTをうまく使えば、ミスを防止しながら業務の負担も軽減できるのではないかと考えていました」

そうした現場の思いが高まる中、高校現場でも校務DX（デジタルトランスフォーメーション）の推進が求められる、統合型の校務支援システムを導入する学校も増えてきた。

「私や田口先生が所属する学事情報室は、各分掌の業務のDX化を支援する校内横断的な組織です。様々なシステムを比較し、出欠管理の電子化や成績管理システムを見直すことを、24年度に校内で提案しました」（岩本先生）

進路指導部長の小林ひかり先生は「校務のDX化によって、慣れ親しんだ運用から変更されることに反対意見もあった」と、校内の議論を振り返る。「授業でのICT活用が浸透したため、出欠管理などにもICTを活用できるという見通しをほとんどの教師が持っていたのは確かです。それでも、一気にデジタル化するのには不安だから、紙の出席簿と併用するのはどうかといった声も根強くありました。訂正印が残るなど、紙ならではの安心感を求める意見でした」

そうした意見に対して岩本先生は、

デジタルとアナログを併用すれば、かつて業務の負担が増えてしまつたと、デジタル化を徹底することによってこそ業務の負担が減り、生み出された時間は生徒のために充てられることを丁寧に説明し、理解を求めた。

「もう終わったの？」 同僚の驚きの声

25年度から導入した校務支援システムによって、出欠管理の負担は大きく軽減した。特に、欠席ではなく、出席停止だったことが判明した場合の複数日にわたる出欠情報の修正がスムーズに行えるようになった。また、欠課の時数や欠席の日数を生徒と保護者がリアルタイムで確認できるようになったことはメリットが大きいと、教務部の安枝優介先生は説明する。

「出欠状況を生徒自身がしっかりと確認するようになりました。以前はごくまれにはありますが、原級留置となるほど、特定の科目の授業で欠課が多かった生徒が、『自分がそんなに休んでいるとは知らなかった』と、慌てて担任に相談に来ることがありました。今年度からは、生徒、教科担任、クラス担任に注意を促す通知が校務支援システムから自動で送られてくるよ

図1 滝川中学校・高校の校務DX



※学校資料を基に編集部で作成。

うになりましたので、そうした重大な事態になる前に早めに対応できますし、教科担当とクラス担任の情報共有の時間も大きく軽減しました」

校務支援システムは各教師が所有する端末と接続しているため、探究学習などでの校外活動の際にも、担当教師が現地で出欠情報を入力することがで

きる。

「これまで、現地で名列表に記入し、出席簿への転記のためだけに、わざわざ学校に戻ることもありました。端末で出欠情報を管理できるようになったため、そうした負担も、個人名が書かれた紙を紛失する心配もなくなりました」(田口先生)

新しいシステムでは、生徒の希望進路の情報も一元管理できるようになったが、ここでもクラス担任の業務の負担が大きく軽減された。

「これまで、生徒の希望進路や入学入試後の可否結果を担当が専用のパソコンで入力していましたが、今は生徒が自分の端末から直接入力できるようになりました。未入力者への通知も行えるので、短期間でのデータ収集が可能になりました」(小林先生)

成績処理においても、統合型のシステムを使い始めてまだ7か月ほどだが、既に業務負担の軽減を実感していると、田口先生は説明する。

「これまで、1学期と2学期の成績を3学期にもう1度見直して、もしもそこで間違いが発見されると、1学期の成績からもう一度集計し直していました。そのため、1・2学期末に丸1日、場合によっては2日ほど成績処理に時間をかけなければいけませんで

した。しかし、今年度はその作業も短時間で終わりました。『え、もう終わったの？ 帰宅していいの？』と、驚きの声を上げる同僚もいました」

同校でそれまで使用してきた成績処理システムは、20年前に構築されたものをベースに、学校独自のルールや教科ごとの慣習を反映させ、更新し続けてきたものだった。

「この先も自分たちで更新していくよりも、更新・標準化を続けてくれる外部のシステムに依頼する方がトータルのコストが下がると考えました。また、成績処理のシステムが変更されたことがきっかけとなり、独自色の強い自校の学習評価のあり方についても見直すべきところは見直していこうという機運が校内で高まっています」(岩本先生)

詳細な生徒把握を生かしたさらなる指導改善も視野に

学事情報室のメンバーは、校務支援システムの導入検討に際して校務DXの先進事例を調べる中で、学校の「あたり前の多くは教師個人や分掌の「習慣」によってつくりられ、定着していくものであることに気づいた。だからこそ、ほかの教師や分掌、さらには他校

の取り組みを知ること、気づかずにできている「あたり前」を、折に触れて見直す重要性を実感したという。

授業改善においても同様で、同校におけるその見直しの動きの1つが、教務担当の安枝先生が参加する授業力向上委員会の活動だ。同委員会では、教師の授業改善に対する意欲を高めるために、継続的に授業見学を呼びかけたり、研究授業を開催したりしている。

「板書があたり前だった授業が、端末や電子黒板を使う授業に一気に変わったように、これからも授業の形はさらに変わる可能性があります。本校には、高い授業力を持った教師が多いからこそ、教科の違いを超えて、いろいろな授業を見る機会をつくってほしいと思っています」(安枝先生)

また、校務支援システムで一元管理する様々なデータを授業改善のために活用すべく、検討を始めた。

「定期考査や模擬試験、小テストなどの結果をダッシュボード(図2)で一元管理することで、各クラス、そして生徒一人ひとりをより多面的に把握することが可能になりました。授業の進め方や学習課題の内容を検討する際の参考として活用し、最終的には進学指導に役立てたいと考えています」(小林先生)

図2 生徒の多面的な把握に活用するダッシュボード



※学校資料を基に編集部で作成。紹介しているデータはダミー。

さらには入学時から卒業時までに行う調査のデータを蓄積して、生徒が自校でどのように成長するのかを分析することで、高校3年間のカリキュラムを改善することができるのではないかと、岩本先生は自校における今後のICT活用の可能性を語る。

「学校で実施してきた様々な調査も、ただ前年踏襲で行うのではなく、指導改善につなげるためにはどんな調査を行えばよいか、見直しを進めていきたいと考えています」

校則の見直し

岩手県立千厩高校
せんまや

生徒主体の校則の見直しを通して、
「自分たちが学校をつくる」意識を高め、行動を促す

岩手県立千厩高校は2024年度、生徒会執行部が中心となり、校則の見直しに着手した。全校生徒を対象に実施したアンケートの結果を基に、生徒会執行部が改定案を作成。各クラスの代表者による代議委員会で議論を重ね、25年5月、身だしなみやスマートフォンの使用に関する校則が改定された。その経験は、「自分たちが学校をつくる」といった生徒の自治意識を高めるとともに、教師の指導観の変化にもつながった。

かつての同校で「あたり前」だったこと

- 1 校則は学校・教師がつくるものという生徒の認識。
- 2 学校をつくるのは教師。

「あたり前」を見直した経緯・きっかけ

- 1 校長が校則の見直しを提案。生徒会執行部が全校生徒を対象に、校則に関するアンケートを実施。
- 2 アンケート結果を基に、生徒会執行部が改定案を作成。それを土台に各クラスの代表者による代議委員会で何度も協議。

見直しの成果・今後の展望

- 1 生徒に「自分たちが学校をつくる」という意識が浸透。学校行事もよりよいものを目指し、各委員会での議論が活発に。
- 2 教師と生徒間の信頼感が高まり、教師の指導観が変化。生徒の主体性をより尊重するように。

自分で考える力を育て、
人権や多様性を意識させたい

「居心地のよい、ちょっとしたいい学校」の実現を目指し、学校の魅力化を推進する岩手県立千厩高校は、2025年5月に行われた生徒総会での全校生徒の承認を経て、校則の一部を改定した。改定したのは身だしなみとスマートフォンの使用に関する項目だ（P.18）。

生徒が校則を見直す活動を始めたのは、24年度に着任した熊谷道仁校長がその年の5月の生徒総会で、「君たちは今の校則に納得していますか。高校生が化粧や髪染め、アルバイトをしてもバイトに乗っても法律上は問題ありませんが、本校ではそれは校則で禁

止されています。それでよいのですか」と問いかけたことがきっかけだった。そのねらいを熊谷校長はこう説明する。

「本校の生徒は日頃から校則を守り、生徒指導上も大きな問題はありませんでした。だからこそ、校則の見直しを提案しました。そのねらいの1つは、何事もうのみにせず、疑問を持ち、自ら考える力を育むことです。規則をただ守るのではなく、規則がなぜあるのかを説明できるようになってほしいという思いがありました。さらに、人権を始めとする権利や多様性への生徒の意識を高めることも、ねらいの1つでした。世界的に人権意識が高まり、様々な背景や特性を持つ人々への理解が求められています。本来は多様性に富む集団



校長
熊谷道仁
くまがい・みちひと

同校に赴任して2年目。



生徒指導主事
林 苗子
はやし・なえこ

同校に赴任して7年目。
指導教諭。家庭科。



生徒指導課
飯塚 高
いづか・たかし

同校に赴任して4年目。
地理歴史・公民科（公民）。



生徒指導課
秋田浩介
あきた・こうすけ

同校に赴任して1年目。
保健体育科。



生徒指導課
菊池俊輔
きくち・しゅんすけ

同校に赴任して1年目。
保健体育科。

学校概要

設立 1902（明治35）年

形態 全日制／普通科・生産技術科・産業技術科／共学

生徒数 1学年約150人

2024年度卒業生進路実績 国公立大は、岩手大、茨城大、青森県立保健大、青森公立大、岩手県立大などに10人が合格。私立大は、盛岡大、東北学院大、東北工業大、東海大などに延べ22人が合格。短大・専門学校進学48人。就職83人。

であるはずの生徒全員がかかわり、身近で、しかし疑問も持たずに守っている校則を見直すことは、2つのねらいを達成する上で有効だと考えました」

アンケート結果から、議論の必要性に気づいた生徒たち

熊谷校長からの提案に対する生徒の反応は鈍く、生徒会執行部も戸惑った。当時の校則に特に不満や問題がなかったため、「校則を見直すと言われても、何をどうすればよいかわからない」と言ってきた生徒会執行部に対して熊谷校長は、「みんなが納得できる校則になっているのかを考えてみて」と伝えた。生徒会執行部は話し合いの末、まずは全校生徒の意見を聞こうと、約450人の生徒を対象としたアンケートを実施。校則の主要項目の「整容」「スマートフォン」「アルバイト」「バイク」、そして校則全般について、「厳しくてよい、今のままでよい、緩めてほしい」の3段階で回答してもらうとともに、見直ししてほしい校則とその見直し案を具体的に記入してもらった。すると、多くの項目で「今のままでよい」が5〜6割、緩めてほしい」が2〜3割となり、見直してほしい校則には、スマートフォンの使用や女子生徒の靴下などが上がった。

図 改定した校則、検討したが改定しなかった校則

■改定した校則

1. 身だしなみ

- 女子生徒の靴下：学校指定の靴下のほかに、紺色や黒色の靴下の着用を許可する。ただし、式典や校外学習の際には、学校指定の靴下を着用する。また、学校指定の靴下を所持していることを確認するため、身だしなみ点検時には学校指定の靴下を着用する。
- ジャージでの登下校：夏季の軽装期間は学校指定のジャージでの登下校を許可する。学校指定以外のジャージを着用しての登下校は認めない。

2. スマートフォンの使用

- スマートフォンの使用を登校時から清掃が終わるまで禁止することに変更はないが、使用可能な時間においては校舎内での使用を許可する。
- 学校行事においてはカメラ機能のみ、使用を許可する。ただし、個人情報の保護の観点から、校内で撮影した画像のSNSへのアップは禁止とする。それが守られなかった場合は、学校行事での撮影許可の特例は廃止とする。

■検討したが改定しなかった校則

1. アルバイト

- 高校生は学業に専念するという観点から、従来通り、特別な事情があり、学校に許可を得た場合以外は禁止とする。

2. バイク

- 交通安全の観点から、従来通り、使用できるのはスクーターのみとする。

※学校資料を基に編集部で作成。

での承認を経て、5月の生徒総会で議案を出し、全校生徒にも承認された。

自由を守るための規律 という視点で校則を考える

生徒会執行部が苦心したのは、自分たちが作成した改定案をどう伝えれば、全校生徒に納得してもらえるかという点だった。アンケートでは化粧やアルバイトなどを認めてほしいという意見が上がったが、生徒会執行部は「学校の秩序を守るものか」「千厩高校として恥ずかしいものか」といった観点で改定案を作成した。しかし、



話を聞いた生徒会執行部。後列左から、熊谷颯汰さん、岩淵宇紘さん、小野寺湊士さん。前列左から、渋谷佳蓮さん、須藤彩音さん（全員3年生）。

生徒会執行部が改定しないと判断したのも、生徒が上げてくれた貴重な意見であることから、改定しないという判断をした理由をしっかりと説明しなくてはいけないと強く思い、どう説明をすればよいのか、頭を悩ませた。

その様子を見ていた生徒指導主事の林苗子先生は、一つひとつの意見について、それを認めたら学校がどのような状況になるか、生徒会執行部がイメージできるように支援した。

『その意見を認めたらどうなる？』などと問いかけると、生徒は「勉強がおろそかになりそう」「部活動の参加率が下がるかも」「地域の人や中学生からの評判が悪くなりそう」などと答えました。『それが改定しない理由になるんじゃない？』と伝えました（林先生）

生徒指導課は、学校・教師として認められない改定案を生徒会執行部が出した時の対応策を考えていたが、結果

としてそれを講ずることはなかった。

「熊谷校長は『自分たちの学校なのだから、自分たちでそのあり方を決められる、学校を変えられるんだよ』と繰り返し伝えていました。生徒会執行部も代議委員も、学校をよりよくするという自覚と責任感を持って話し合っていました」（林先生）

生徒会執行部は、「校則の意義について話し合い、私たちの間に『ルールは最低限の自由を守るためにある。自由を守るための規律という視点で校則を考える』という共通認識が生まれました。それを念頭に校則を改定した結果、以前よりもさらに居心地のよい学校になったと感じています」と語る。

生徒の議論が建設的に進むよう、教師が支援

生徒主体の校則の見直しが結果するよう、同校の教師は生徒を見守りつつ、励まし、助言してきた。生徒に伴走する意識は日々の活動にも広がり、教師と生徒の対話も増えた。それは、生徒の「先生は自分たちの話を聞いてくれる」という信頼感と、「自分たちが学校をつくる」という意識の醸成につながり、様々な活動が生徒主体となっている。その一例が、今年7月に行われたク

ラスマッチ（体育祭）だ。生徒会執行部と各クラスの代表者から成る実行委員会でクラスマッチの企画・運営について何度も議論を重ねた結果、「クラスの団結力を高める」という趣旨の下、前年度までの種目を一部変更し、開催期間も1日増やして3日間に決定した。

生徒の議論を見守った、生徒指導課の秋田浩介先生は次のように語る。

「各クラスの代表者は、自分のクラスから預かった意見を通そうと、時に一方的な発言をしました。そうした時だけは私が生徒の間に入って発言の趣旨を整理するなど、建設的な対話になるよう支援しましたが、それ以外は頼もしく思いながら議論を見ていました。生徒が学校行事をよりよくしようと、様々な角度から議論を重ねたのは、校則の見直しの経験が生きているからだと感じました」

多様性に目を向けた生徒の意識をさらに高めたい

一連の活動は教師の意識も変えている。生徒指導課の飯塚高先生は、部活動の指導を見直したと言った。

「生徒が校則を見直す姿を通して、生徒は普段何も言わなくても自分の考えを持っているのだと再認識しました」

その考えを表現し、主体的な行動へと結びつける力を、教師が育てていなかったのだと痛感させられました。その反省から、私は部活動で、活動時間のうちの30分〜1時間程度を、生徒が自分で練習内容を考えて実践する時間としました。生徒の成長に合わせてその時間を増やしていきたいと考えています」

今年度に着任した生徒指導課の菊池俊輔先生も、指導観が変わった。

「私は校則の改定は教師主導で行うものだと思っていましたが、生徒の力でもできるのだと実感し、考え方が変わりました。ただ、『最後は先生が何とかしてくれる』などとならないよう、教師は口を出したくなるのを我慢し、『これはあなたの仕事』と、生徒に責任を持たせることが重要だと感じています」

生徒主体の校則の見直しは、生徒自治が進むとともに、生徒や教師の固定観念を揺り動かす契機となった。熊谷校長は今後の方向性を次のように語る。

「生徒が触れている社会は狭いため、それを広げ、疑問を持つ意識を一層高めていきたいと考えています。今回、校則に対して様々な意見が出たことで、同じ学校の生徒でも多様なのだと生徒は意識し始めました。その意識をさらに高められるよう、地域に暮らす外国人とも連携した活動を検討しています」

教師だからできる、生徒の「あたり前」の見直しへの伴走

生徒が主体となって学校の「あたり前」を見直す際、教師にはどのような伴走が求められるのか。全国の学校のルールメイキングの活動の支援に取り組むカタリバの藤本雅衣子氏に聞いた。

生徒が「あたり前」を見直す上で重要となる教師の存在

中学生・高校生が校則やルールを対話的に見直す「みんなのルールメイキング」は、経済産業省「未来の教室」実証事業として2019年にスタートしました。生徒が教師や保護者との対話を重ねながら、校則やルールにおける納得解をつくる過程を経験する中で、社会で必要な課題発見力・合意形成力・自己効力感などを育むことができますと考えました。つまり、ルールメイキングの価値は、校則やルールをど



認定特定
非営利活動法人
カタリバ
藤本雅衣子
ふじもと まいこ

2021年カタリバ入職。大型イベント「ルールメイキング・サミット」や、ルールメイキングに取り組む教師を支援する「ルールメイキングパートナー制度」の立ち上げを担当。現在は「みんなのルールメイキング」事業責任者。

う変えたかということではなく、どのような対話のプロセスを歩んできたかで決まります。

生徒にとって、異なる価値観の持ち主と互いを尊重し、校則やルールについて話し合うことは、自分と他者の違いを知る機会になり、自己理解を深めるチャンスになります。そうした経験は、納得感のある自己決定を行いながら、自分らしく生きていくために必要なことであり、それもルールメイキングの価値の1つだと私は考えています。

ルールメイキングにおける対話をよりよいものとする上で、教師の存在は重要です。生徒が「なぜ、この校則が必要なのだろう」という疑問を持った時、教師が「それがルールだから」といった言葉を返すのではなく、生徒の「なぜ」に応答し、その疑問とともに考えようとする姿勢を示すことは、生徒が「自分の考えを言ってみよう」と思うきっかけになるでしょう。そして、校則の制定の理由を丁寧に説明した

り、教師自身にも分からないことは「分からない」と正直に答えたりすれば、「疑問にはちゃんと答えてもらえるんだ」といった安心感を生徒は得て、対話のプロセスを歩き続けることができます。

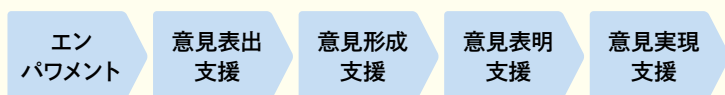
例えば、靴下の色の指定を見直す活動は、大人にとっては些細なことに思えるかもしれませんが、生徒にとっては毎日の生活にかかわる大事なテーマです。矮小化したり、否定したりするのはなく、教師がそれを尊重し、生徒の意見に耳を傾ければ、生徒は当事者として、校則やルールについて話し合いを続けることができます。

意見表明までの ステップに寄り添う

生徒も私たち大人も、いきなり練り上げられた意見を表明することはできません。意見の表明までにはステップを踏む必要があります(図)。

図 生徒が意見を表明し、実現するまでの支援のステップ

教師の働きかけ



最初から意見や結論を求め過ぎず、まずは生徒が思いや疑問を言葉にできる安心・安全なチームをつくる。

多様な他者との対話や交流を通じて、生徒の思いや疑問が「意見」になるように支援する。

出てきた意見の実現に向けて支援する。

最初は自分の気持ちを口に出さず、さえたためらう生徒もいます。教師が生徒の意見にきちんと耳を傾けることを宣誓したり、「先生も、実はこの校則

※藤本氏の提供資料を基に編集部で作成。

は変えた方がよいと思っていたんだ」といった話をしたりするなど、生徒が安心して話ができる場をつくるのが最初のステップです。

「自分はこう思っていた」などと、生徒同士で校則やルールについて自分の気持ちを語り合う中で、徐々に一人ひとりの意見が形作られていきます。その際、自分と同じ環境で学んでいる仲間の意見は、自分の意見を形成していくための材料になります。また、保護者や地域の人たちと校則やルールについて話し合ったり、企業を訪ねて就業規則などのルールについて聞いたり

することからも、新たな気づきを得ることができます。

次のステップでは、生徒が教師に自分たちの意見を伝え、新しい校則やルールを提案し、最終的には教師はその実現に向けて支援します。そして、新しい校則やルールができてからも、生徒の意見を聞きながら見直しを続けていくことが大切です。

なお、生徒が提案した校則やルールは、すべて受け入れなければいけないわけではありません。受け入れられないことは、なぜ受け入れられないのかを説明することが重要です。そして、

「先生から見ると、こういう理由で受け入れ難いんだけど、どう思う？」などと対話続けることで、生徒は新たな気づきを得て、さらに意見を練り上げていくでしょう。また、予算や法律で規制されている事柄など、学校の裁量では見直すことが難しい事情がある場合は、意見を募る前に生徒にその事情をしっかりと伝えておけば、生徒はそれも踏まえて意見を出すはずで

す。ルールメイキングの活動を通して、教師の中にも自校の校則やルールに対して疑問を持っている人が少なくなっていくことを実感しました。教師も校則やル

ールについての自分の思いを語ることで、職員室の中に多様性を受容する風土をつくることができるはずです。

●教師向け実践ガイド

「児童・生徒とともにつくる学校 POINT BOOK」

<https://rulemaking.jp/news/4029/>

「生徒の意見を取り入れるルールメイキングに取り組んでみたいが、何から始めたらよいかわからない」といった、現場の教師から寄せられた相談を基に、ルールメイキングにおいて大切にしたい観点を具体的な場面の中で紹介している、カタリバ作成の教師向けのルールメイキング実践ガイド。

本特集を振り返って

学校を持続可能にする、自校の新しい「あたり前」を創る

VIEWnext編集部 統括責任者 柏木 崇



自校の見直すべき「あたり前」に気づけるようになるためには、次の視点で取り組みや活動、仕組み・制度を見るとよいことを、課題整理で紹介しました（詳細はP.7図3）。

視点1 ● 目的に合っているか

視点2 ● 目的に応じた成果を出しているか

視点3 ● 効率的に進められているか

視点4 ● 時代の要請を踏まえているか

視点5 ● 生徒が主語であるか

以上は、教師や自校の内なる視点として持つておくよい視点ですが、それらに加えて外なる視点、すなわち校外の人から見た時に、各取り組みや活動、仕組み・制度

はどうなのかといった視点を取り入れることも、見直すべき「あたり前」に気づくためには重要ではないかと、各校の事例を通じて感じました。例えば、長野県野沢北高校が採点業務の方法を見直したきっかけは、柳沢校長が紹介した全国紙の記事でしたし、今回取材したある学校の先生は「他校から赴任してきた自分だったから、自校の見直すべき『あたり前』に気づけた」とおっしゃっていました。ただ、見直すべきだと思っても、それを指摘するのは簡単なことではないでしょうし、赴任したばかりの先生などであればなおさらかと思えます。そこで重要となるのが、カタリバの藤本

さんのお話にもあった、教師や生徒が自分の思いや疑問を言葉にできる安心・安全な組織・場をつくることです。今回の事例からも分かるように、そつした組織・場をつくれるかどうかは管理職の先生にかかっています。また、「あたり前」が見直されるまでには相応の時間が必要であることも、多くの事例に共通していました。急がずに、少しずつ見直しを進めること、そしてその過程で得られた成果や効果を共有しながら、校内での対話・議論を重ねていくことで、生徒の未来のためにある学校を持続可能な場所とする、自校の新しい「あたり前」が創られるのだと感じました。



学校改革

より選ばれる学校を目指し、全教師が 最大限の力を発揮できる体制を確立

千葉県・私立東葉高校^{とうよう}

1分で分かる軌跡

入学者の定員割れが課題だった千葉県・私立東葉高校は、2017年度の西村桂校長^{かみむら}の着任を機に、学校改革に着手した。校長と各主任が議論して策定した毎年度の目標や活動方針を校長から全教師に発信することで教師のベクトルをそろえ、各主任が新しい活動に挑戦しやすい体制を確立。また、年2回の授業アンケートを軸にPDCAサイクルを回す仕組みを構築し、授業改善を図った。そうした学校の改革が地域に周知されるに連れて入学者の学力が向上。授業改善も相まって大学合格者数が増加するという好循環が生まれている。

#対話を通じた目標設定
#授業アンケート

学校概要

設立 1925（大正14）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約350人
2024年度卒業生進路実績
国公立大は、秋田大、福島大、高知大、千葉県立保健医療大、公立諏訪東京理科大に8人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、慶應義塾大、中央大、東京理科大、東洋大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ516人が合格。



情報管理部副部長
木根淵 亨
きねがうち・とある
同校に赴任して9年目。
外国語科。



2学年主任
吉澤碧美
よしざわ・あおみ
同校に赴任して16年目。
国語科。



主幹教諭
青山 均
あおやま・ひとし
同校に赴任して4年目。
理科（物理）。



学習進路部長
中田義元
なかだ・よしもと
同校に赴任して10年目。
理科（生物）。



校長
西村 桂
にしむら・かつら
同校に赴任して10年目。

変革の背景

生徒が毎日楽しく 来られる学校をつくる

東葉高校は、2005年度に女子校から共学化したものの、入学者の定員割れと大学合格実績の低迷が続いていた。その状況を打開するため、姉妹校で大学合格実績を伸ばした手腕を買われた西村桂先生が17年度、校長に着任した。

「着任当初の生徒の多くは自己肯定感が低く、うつむきがちでした。学力の向上もさることながら、まずは生徒が毎日楽しく学校に来られるようにしようと考えました」西村校長は早速、「他校と違ったワクワクする学校」をビジョンに掲げ、お笑い芸人のライブやホテル観賞会などのイベントを自ら企画し、月1回のペースで実施し始めた。すると次第に、生徒は前向きに学校に通うようになっていった。2学年主任の吉澤碧美先生は、当時の生徒の変化をこう振り返る。

「小さなことですが、『イベントの

申し込みを早くしなくちゃ』などと、生徒が自ら動くようになりました。楽しく活動するうちに、『あれもやってみよう』といった主体性も見られるようになりました」

生徒が楽しそうに学校に通うようになったら、その姿を見た保護者は「学校が変わろうとしている」と期待感を持つ。それが□□ミで地域に広がることも、イベントのねらいの1つだった。

変革の一手①

年度末に校長と各主任が 議論し、次年度の目標を策定

教育活動の改革にも西村校長は着任1年目から着手した。教師のベクトルをそろえようと、5年ごとの中長期目標を策定。20年度までの第1ステージは「東葉高校の基盤づくりと入学者数増加・レベルアップ」という目標を設定した。そして毎年度初めに、西村校長が当該年度の目標や活動方針、評価指標を提示（P.24図1）。それを基に、各分掌・教科・

学年が活動計画を立てるようにした。各年度の目標などは、各主任が分掌・教科・学年の中で話し合って設定した目標を基に、西村校長と各主任が議論し、それを踏まえて西村校長が策定した。

「目標には分掌や教科、学年の考えが反映されているため、教師は目標を自分事として受け止められますし、その達成に向けた活動計画も具体的に考えることができます。目標が校長からの正式な発信となることで、新しい取り組みに対して他の教師から大きな反発が起こりにくいという利点もあります」（西村校長）

各主任も教師のベクトルをそろえることに力を入れた。学習進路部長の中田義元先生は、目標から逆算して活動計画を立て、活動の実施要項を細部にわたって作成し、学年団に周知することを心がけた。

「実施要項で生徒への支援の手順を細かく示しても、それだけでは十分には理解されないことが少なくありません。どの教師も同じベクトルで生徒を支援できるよう、教師一人ひとりと話し、計画の不明点を説明

したり、改善案を聞いたりして、活動の細部を詰めていきました。そうした対話は、教師が計画に沿ってやらされるのではなく、主体的に取り組めるようにするために重要でした」（中田先生）

年度の目標等の策定時には、改革のための新たな挑戦を加える一方で、既存の活動の見直しも行っている。例えば25年度は、2学期の学習時間の確保のために文化祭の開催日を9月から6月に変更した一方で、校内留学（＊1）やテーブルマナー講座を廃止した。

さらに、各主任は若手の教師を積極的に抜擢（はってき）。西村校長は職員室で教師一人ひとりに声をかけたり、個別に語り合ったりすることを通じて各教師の人となりをつかみ、力を発揮できそうな役割を担わせるようにしているという。

「全教師が最大限の力を発揮してこそ、よりよい学校になっていきます。あの教師は力がない、やる気がないなどと決めつけずに、対話を通じてその教師がやりたいことを見だし、役割を担わせるようにしています」（西村校長）

図1

2025年度 学校ビジョン（抜粋）

学校教育目標	建学の精神「人間尊重・個性尊重・第三教育」に添い、生徒の持ち味、可能性を信じ、自分で自分を教育する人間教育の実践。他校と違ったワクワクする学校・楽しい学校を全教師の力で創造する。謙虚にして驕らず、さらに努力を、勝負の神様は細部に宿る
--------	--

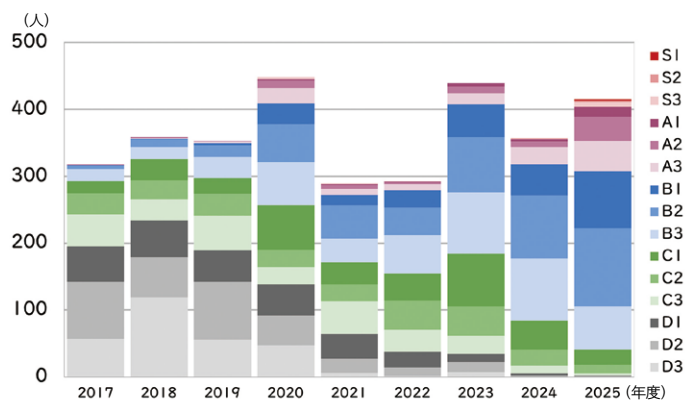
具体的な目標		
目指す学校像	目指す生徒像	目指す教師像
①主体的・対話的で深い学びの授業による進路実現 ②挨拶が自然に生まれ、笑顔があふれる楽しい学校 ③防災や安全、見守りなど、	①自ら考え、自ら行動できる生徒の自立を養成 ②自分を大切にし、友だちを思い、よりよい人間関係の確立	①教育という素晴らしい仕事に「誠実・尊重・貢献」できる教師 ②日々研鑽を積み、専門職としての力を高める教師

- a. 東葉高校は教育の未知への挑戦に真摯に取り組み、仲間を巻き込んでいく。「現状維持は後退」であり、常に新しい世界にチャレンジし、ワクワクする企画や互いに高め合う土壌を創る。生徒が満足する楽しい学校を目指し、進学実績は保証するが、進学校にはならないようなメリハリのある学校を目指す。日本の既存の教育を刷新する気概を持って新しいスタイルの教育「東葉メソッド」を追求する。
- b. 東葉高校の教育理念「人間尊重」「個性尊重」「第三教育」を軸に、生徒のよいところを伸ばし、「人間力」を養う教育を基本とする。生徒の自立と自律を成長のために、学業だけでなく朝読書・クラブ活動・生徒会・委員会活動・多様な行事などに主体的に取り組ませ、自己肯定感、自信、誇り、愛校心を持てるような仕掛けづくりに取り組む。生徒全員を卒業させることを教育の基本とし、欠席・遅刻の減少、不登校や退学を減らしていく。
- c. 船橋市は人口減少が緩やかな地域であるが、15歳人口は15年後に60%となる。15年

西村校長が年度初めに示す「学校ビジョン」には、目指す生徒像や具体的な取り組み、評価指標などに加えて、自校の現状分析と今後目指す方向性も具体的に示されている。
※学校資料を抜粋して掲載。

図2

1年次4月の学力層の推移



入学者のGTZ（＊2）は、C～Dが年々減少している。 ※学校資料をそのまま掲載。

変革の一手② 2つの授業アンケートを軸に、日常的に授業改善

授業改善の軸としているのが年2回実施している、生徒が対象の授業アンケートだ。7月に実施する1回目は無記名で、生徒は自分が受けている各授業を「とても満足、少し満

足、少し不満、とても不満」の4段階で評価する。教師ごとに平均値が算出され、夏季休業中の終盤に行う校内研修で上位10人が発表される。

「アンケート結果から、自分は生徒を引きつける授業ができていないかを受け止めています。上位者の授業は担当教科ではなくても見に行き、自分にはない工夫点を見つけて、取り入れるようにしています。西村校

長が『許可不要・短時間可・他教科可』と授業見学を奨励しているため、見学しやすくなりました」（中田先生）

2回目のアンケートを実施するのは11月で、生徒は記名し、「授業の分かりやすさ」「先生のやる気」など、10項目について教師ごとに評価する。アンケート結果は本人にのみ渡し、上位者の発表はしない。情報管理部副部長の木根淵亨（きねふみ）先生は、次

＊1 英語4技能の運用力の習得や、能動的なコミュニケーション力の育成を目的として、校内で5日間、外部からネイティブ講師を招いて行ってきた語学研修。

＊2 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。

のように活用している。

「どの生徒がどのような評価をしたのかが分かるため、例えば、『授業の分かりやすさ』の評価が低かった生徒がいれば、その理由を考え、授業改善を図っています」

生徒が求める授業の質も変化してきていると、吉澤先生は語る。

「年々入学者の学力や進学意識が高まり(図2)、楽しい授業よりも、学習内容がしっかり理解できる授業が評価されるようになっていきます。新しく赴任した教師に、前任校の授業の進め方やよい教材などを聞きながら、毎年、授業を見直しています」

毎年変化する生徒の状況を正確に把握するため、模擬試験の分析を全学年で4、7、1月の年3回実施。分析の結果は、目の前の生徒に応じた授業づくりに生かしている。

理科では、物理担当の青山均先生^{（せやま ひとし）}の提案で、大学入試問題研究会を始めた。同校で志望者数が多い大学の入試問題を分析し、難易度や解法のポイントなどをまとめて、学校独自の大学入試問題集を作成している。

「大学入試の問題が頭に入った状態

態で授業づくりをすると、演習問題

の選び方や説明の際に強調する部分などが大学入試を意識したものになります。1年次からそうした授業を行えば、生徒は目標に向けて意欲的に学ぶようになります」(青山先生)

授業でのICT活用も進めている。全生徒にタブレット端末を配布するとともに、各教室にホワイトボードとプロジェクター2台を設置(写真)。生徒の意見を画面に映すなど、教師と生徒の双方方向による授業づくりに生かしている。また、ICTを活用した授業を各学期、6人の教師が公開し、ノウハウを共有している。



写真 各教室にプロジェクターを2台設置。基本は、教師からの説明用と生徒のアウトプット用という使い分けをしている。

変革の成果と展望

進学実績だけではない、特色ある魅力を打ち出したい

改革が進むに連れて、同校の改革を理解して第1志望で入学する生徒が増えていった。教師が一層授業づくりに力を入れたことで授業の質が高まり、大学合格者数が増加するという好循環が生まれている。7月の授業アンケートの全教師の平均値

は、初回の17年度は4点満点中2.8だったが、現在は3.6まで上昇した。

今後も生成AIの活用による授業や校務の改善、総合型選抜への対応など、新しい取り組みを進めていく。

「本校は若手の教師の増加に伴い、挑戦に対して協力的な学校文化が定着しました。少子化が進む中でも選ばれる学校であり続けるためには、進学実績以外の魅力が不可欠です。そうした魅力づくりににも挑戦していきます」(西村校長)

ベネッセが見た軌跡

生徒も先生もワクワクする、チャレンジがあふれる学校

東葉高校は私の故郷にある学校で、地元住民としても学校担当としても、同校の大きな変化を目のあたりにしています。印象的なのは、先生方全員が同じ目標を前のめりに熱く語られることです。組織としての一体感と視座の高さを強く感じています。生徒と先生の距離が近い上に教室の雰囲気も明るく、結果として、模擬試験の成績も飛躍的な変化を遂げています。また、社会で教師不足が深刻化する中、「この学校で働きたい」と先生方が集まってきていることも、とても素敵な点です。1人の先生から生徒へ、生徒から別の先生へ、そして学校全体から地域全体へとワクワクが伝播しており、私も学校訪問をする度に、そのエネルギーに触れてワクワクしています。そうした東葉高校が描く唯一無二のビジョンの実現に向けて、ベネッセとして今後も全力でご支援してまいります。

株式会社ベネッセコーポレーション首都圏支社
千葉県・私立東葉高校担当 惣田拓樹



Web VIEWnext ONLINE

関連記事はこちら!

今回のテーマに関連する過去の記事は、教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。

2019年10月号 指導変革の軌跡 静岡県立焼津中央高校

▶ https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article04765/



2026年度大学入学共通テスト直前期の 出願指導のポイント

大学入学共通テストから国公立大学の出願までの期間はわずかしかなかった。生徒が納得のいく進路選択をするためにも、出願パターンをあらかじめ考えておくことが重要だ。2026年度大学入学共通テストの実施が目前に迫る今号は、同テスト直前期の出願指導のポイントについて考える。

「欠かせない出願パターンの可視化」

出願校の変更基準と変更後の
出願校を事前に想定しておく

2026年度大学入学共通テスト（以下、共通テスト）の実施日から国公立大学の一般選抜の出願の締め切り日まで、わずか17日しかない。共通テストの結果が芳しくなかった生徒が、共通テスト後から出願校の変更を検討し始めたものの、保護者と意見が食い違ったりなどして、出願校の決定に苦労するケースも少なくない。また、出願校を変更する生徒が多い場合は、特に出願指導の経験が浅い教師にとっては大きな負担になりかねない。生徒が納得のいく進路選

択となるよう、合格したら進学してもよいと思える第2・第3志望校の検討は共通テスト前までに行っておきたい。

その際、出願校を変更する基準を、共通テストの具体的な得点や志望校判定で想定しておく、共通テスト後の出願校の検討がスムーズになる。

例えば、公立A高校では、12月に個人面談と三者面談を行い、図1のシートを用いて出願パターンを可視化している。そして、共通テスト後に実施する校内の出願検討会では、図1を用いて「基準点に達したので、パターン①の出願をします」「判定がよくなかったため、パターン②の出願をします」といった確認のみ

図1 公立A高校 出願シミュレーション、出願検討会資料

翌年再受験が可能な場合は、「共通テストの得点によらず、第1志望を貫くパターン」も許容。それが無理な場合は、「共通テストの得点や志望校判定でどう出し分けるかの3パターン」を検討する。

■一般選抜 出願シミュレーション 出願検討会資料■

☐ 担任の先生との個人面談・保護者懇談の結果を踏まえ、下記を記入してください。

年	組	番	氏名
3			

(1) 翌年再受験の可否… (可 不可)

(2) 出願シミュレーション

①：最も望ましい出願パターン			②：次のパターン			③：その次のパターン		
設置	区分	大学/学部/学科/専攻等	区分	大学/学部/学科/専攻等	区分	大学/学部/学科/専攻等	区分	大学/学部/学科/専攻等
国公立	前	A大学/工学部/機械科	前	B大学/工学部/機械科	前	C大学/理工学部/機械系	前	
	中		中		中		中	
	後	B大学/工学部/機械科	後	C大学/理工学部/機械系	後	D大学/工学部/学科一括	後	

ポイント①

※①から②へ変更する基準

共通テスト ●●点
または
A大学（第1志望）がD判定

※②から③へ変更する基準

共通テスト ▲▲点
または
B大学（第2志望）がD判定

※“安”の欄について：安全校として設定している大学に○をつけてください。

【共通テスト利用入試】			【一般選抜】			
設置	安	大学/学部/学科・専攻等	安	大学/学部/学科・専攻等	安	大学/学部/学科・専攻等
私立						

ポイント②

ポイント③

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 出願校の変更基準の設定方法

■出願予定校が合格者最低点を公表している場合
合格者最低点・平均点一覧

大学名	学部	種別	性別	科目	共通テスト			個別試験			総合		
					最低点	平均点	満点	最低点	平均点	満点	最低点	平均点	満点
加川大	医	医	一	前	405.1	451.8	620	198.0	190.9	230	711.3	724.7	920
加川大	医	医	一	後	514.5	533.8	620	198.3	190.9	230	711.3	724.7	920
加川大	医	看護	二	前	300.5	337.4	520	234.2	234.2	400	607.3	631.8	920
加川大	医	看護	二	後	293.9	346.0	520	198.3	238.7	300	548.3	584.7	820
小樽大	商	商	一	前						500	824.0	881.0	1400
小樽大	商	商	一	後	695.0	719.8	900				695.0	719.8	900
小樽大	商	商	二	前						200	489.0	517.3	800

$$\text{基準点} = \text{合格最低点} \times 1.1 \sim 1.2$$

基準点を厳しめに設定

- ・共通テストの配点が高い
- ・2段階選抜の実施が予告されている
- ・絶対に翌年再受験できない
- ・記述式の模擬試験の結果がよくない

基準点を甘めに設定

- ・個別学力検査の配点が高い
- ・翌年再受験してでも第1志望にこだわりたい
- ・記述式の模擬試験の結果がよい

■出願予定校が合格者最低点を公表していない場合
得点帯別合格率 入試結果／データネット ※1000点集計

年度	2024		
得点	合格率	合格者	不合格者
740		1	
730		5	
720	100	1	
650		17	12
640		14	24
630		5	22
620	18	1	15
610		1	17
600			16
590			9
470			
460			1
450			

入試結果の合否度数分布を
基に基準点を設定

※大学の公表値とは異なり、入試結果調査の協力校のみのデータのため、やや厳しめの基準とする方がよい。

※資料はいずれもベネッセハイスクールオンラインに掲載。

出願校の変更基準を決める際には、各大学の過去の合格者最低点が参考になる(図2上)。「合格最低点×1.1〜1.2」を基準点として、①基準点を超え、最も望ましい出願パターンのほか、②基準点をやや下回る場合の出願パターンと③基

出願指導のポイント① 過去の入試結果データを基に 出願校の変更基準を決める

を行うことで、各クラスに数人はいる、進路に迷っている生徒の検討に時間をかけることができ、スムーズな出願指導を実現している。

出願を予定していた大学が合格者最低点を公表していない場合は、合格者平均点や過去の入試結果の合否度数分布(図2下)などを用いて、基準点や基準となる判定を決めるとよい。なお、共通テストの平均点は年によって変動するため、実際の出願では、事前に設定した基準点に平均点の変動を加味した上で

基準点をかなり下回る場合の出願パターンの3パターンを設定したい。
出願校の変更基準は、共通テストの配点が高い場合は厳しめに設定、過去問題を解いた感触や記述式の模擬試験の結果から個別学力検査で逆転できそうであれば甘めに設定するとよいだろう。

出願指導のポイント② 生徒が希望する条件を 確認して、出願パターンを検討

判断する必要がある。その際は、大学入學共通テスト自己採点集計サービスで提供するデータも活用してほしい。

変更後の出願校の検討が十分にできていない場合は、生徒が希望する条件を確認しながら、それに合う大学を、共通テスト前までに考えておくことが重要だ。特に次のような条件は優先して確認しておくよう、生徒に伝えたい。

- 「他エリアも視野に入れられるか」
他のエリアに目を向けると、合格可能性の高い大学が一気に増えることがある。「自宅から通える範囲まで」「全国どこでも下宿可能」など、条件を具体的に確認しておきたい。
- 「学びたいこととの親和性」
入試の難易度だけを考慮して出願校を変更すると、その大学に入学後、学びの意欲が持続しなくなる恐れがある。第2志望以下の大学でも学びたいことが学べるのか、生徒が納得のいく出願となるよう、カリキュラムから授業内容、研究室やゼミでの学びまで、しっかりと

調べて出願校を検討するよう、生徒に促したい。
●「取得できる資格」
教員免許など、特定の資格の取得を重視する場合は、目指す資格の取得が可能な大学から志望校を選ぶ必要がある。
生徒が希望する条件の整理ができたら、図3の「Compass」の大学検索や志望校Aーサーチを活用し、エリアや学問系統、合格可能性の判定基準などを指定して、候補となる大学を検討したい。条件にあてはまる「安全校」の大学も探しやすいため、活用してほしい。

図3 Compass 大学検索 志望校 AI サーチ

● Compass > 判定シミュレーション > 大学検索 > 志望校 AI サーチ

生徒が模擬試験などで記入した志望校の「設置区分」「エリア」「学問系統」などの情報を基に、生徒の志望に合致しそうな候補校を「挑戦校」「実力相応校」「安全校」に分けて提示することが可能。

挑戦校	実力相応校	安全校
1. ○○大 法学部 D 法学部 法学部 法学部	1. ○○大 心理学部 C 心理学部 心理学部 心理学部	1. ○○大 心理学部 B 心理学部 心理学部 心理学部
2. ○○大 人文科学部 E 人文科学部 人文科学部 人文科学部	2. ○○大 心理学部 C 心理学部 心理学部 心理学部	2. ○○大 社会心理学部 A 社会心理学部 社会心理学部 社会心理学部
3. ○○大 工学部 A 工学部 工学部 工学部	3. ○○大 心理学部 C 心理学部 心理学部 心理学部	3. ○○大 人文科学部 B 人文科学部 人文科学部 人文科学部

※表示している画面はイメージです。

出願指導のポイント 3

私立大学の併願は挑戦校、実力相応校、安全校をバランスよく

国公立大学が第1志望の場合、私立大学の併願校は図4のように、入試難易度ごとに挑戦校、実力相応校、安全校をバランスよく考えておきたい。

特に第1志望校の合格可能性の判定結果が芳しくない場合は、国公立大学の中期・後期日程で安全校を確保したり、私立大学の受験校の数を増やしたりするなどの方策を考えたい。

また、私立大学は入試方式のバリエーションが豊富であり、得意教科・科目の配点が高い入試方式などでは生徒の強みを生かすことができる。

近年、国公立大学との併願を想定した多科目型の共通テスト利用入試を実施する私立大学が増加しており、その活用も検討したい。中でも私立大学独自の個別試験と共通テストを併用する入試方式は、私立大学を専願する受験生にとっては対策の負担が大きいことから実質倍率が低くなる傾向があるため、共通テストを受験する国公立大学志望の生徒には積極的に活用を促したい。

私立大学の併願校を検討する際に押さえておきたいのは次の3点だ。

●「入試日が重複していないか」

受験直前に入試日の重複が発覚することを避けるため、受験スケジュールを提出させるなどして、確認を促したい。

●「入試日程が過密ではないか」

入試が4日以上続くと、体力的に厳しくなると言われている。特に長距離の移動を伴う受験がある場合は、余裕を持った日程となるように検討したい。

●「入学金の二重支払いをできるだけ避ける」

入学手続きの締め切り日によっては、複数の大学に入学金を支払う必要が生じる。受験費用を抑えたい場合は、第1志望校の合格発表の後に併願校の入学手続きの締め切り日が来るように受験スケジュールを組むのが理想的だ。しかし、国公立大学の前期日程の合格発表日以降に入学手続きの締め切り日が設定されている私立大学は限られている。そのため、私立大学への入学金の支払いが1校のみとなるような受験スケジュールを組むことが現実的だ。

なお、25年に文部科学省が各大学に出した入学金の支払いについての通知（＊）を受け、桃山学院大学など、入学金の返金制度を設ける大学も出てきている。併願候補校にそうした制度を新設する大学がないか、確認しておきたい。

図4 併願する私立大学の考え方

国公立大学志望者の 私立大学併願戦略	第1志望の国公立大学 AB判定の場合	第1志望の国公立大学 CDE判定の場合
	挑戦校・実力相応校・安全校をバランスよく 個別試験は3～4回程度	志望度の高い大学のチャレンジ回数を増やす 個別試験は7～8回程度
挑戦校 <DE判定>	A大学 個別方式 共通のみ方式	A大学 個別方式Ⅰ 個別方式Ⅱ 共通のみ方式 B大学 個別方式 共通のみ方式
実力相応校 <C判定>	C大学 個別方式 共通のみ方式 D大学 個別方式 共通のみ方式	C大学 個別方式 共通のみ方式 D大学 個別方式 共通のみ方式
安全校 <AB判定>	E大学 共通のみ方式	E大学 全学部方式 共通のみ方式 F大学 共通のみ方式

共通テスト後の出願指導

共通テストの平均点は年によって変動するため、実際の出願にあたっては、事前に設定した基準点に平均点の変動を加味した上で出願校を決定する必要があります。共通テスト後の出願指導のポイントについては、『VIEW next』高校版 2025年1月号の本コーナーの記事をご参照ください。

https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article30794/ または上記の2次元コードからアクセスしてください。



＊「私立大学における入学料に係る学生の負担軽減等について」（令和7年6月26日付文部科学省高等教育局私学部長通知）

出願指導において大事にしたいモチベーションマネジメント

出願指導において、教師に求められる重要な役割の1つとして「生徒のモチベーションマネジメント」があります。多くの場合、本格的な受験勉強は高3の夏季休業前から入試本番まで、半年以上続くものですし、第1志望校だけでなく、併願校にも出願することを踏まえると、進路決定までに複数の入試結果に向き合うことになります。そのような状況下では、生徒一人ひとりの心理的な安定とやる気を維持することが、納得できる進路決定につながる鍵となります。今回は、モチベーションマネジメントのポイントとともに、具体的な対応策について解説します。

最初のポイントは、「長期間にわたる受験勉強への伴走的なサポート」です。近年、大学入試の多様化や選抜方法の変化により、受験のスタートから進路決定までの期間が長くなっています。かつては「前期日程（＋中期日程）＋後期日程」がスタンダードでしたが、後期日程の廃止が続き、さらに学力型の総合型選抜の登場によって、「年内入試＋前期日程」という組み合わせが広がっています。その期間、生徒は不安や焦りを感じやすく、モチベーションの低下や精神的な疲弊を招くこともあります。そのため、生徒との定期的なコミュニケーションを通じて心情を把握し、適切な励ましやアドバイスを行うことが求められます。具体的には、模擬試験の結果の確認や学習進捗の把握、小さな成果やその兆しへの着目によって、生徒の自己効力感を高め、長期的なモチベーション維持に努めることが重要です。

ポイントの2点目は、「併願校に合格した生徒の第1志望校に対する憧れやこだわりを薄れさせない」ことです。併願校に合格した場合、安心感から第1志望校の受験意欲が低下することがありますが、第1志望

校に挑戦することの意義や、進学先の変更による将来のキャリアへの影響などを丁寧に説明する必要があります。第1志望校の合格にこだわるのが自分自身の可能性を広げる経験になることを伝え、挑戦意欲を喚起したいところです。併願校の合格という結果と、それに至った努力を認めつつも、最終的な目標を見失わないように導くことが大切です。

ポイントの3点目は、「合格を確保しておきたかった大学が不合格となり、不安や焦りを感じている生徒へのケア」です。そのような生徒においては、計画と今後の見通しにズレが生じたことで、精神的に追い詰められることがあります。まずは彼らの気持ちに寄り添い、結果の受け止めと、その背景を冷静に分析することが重要です。その上で、次のステップや代替案を具体的に提案し、ここからの再チャレンジについて前向きに考えられるよう、促しましょう。また、これまでの努力や成長を振り返る時間を設け、自信を取り戻すサポートも効果的です。励ましの言葉や、過去の卒業生の成功例の紹介を通じて、自身の可能性を信じさせ、前向きな気持ちを持たせることが、モチベーションの回復につながります。

総じて、出願指導においては、生徒の心理的な側面に配慮し、長期的な視点でモチベーションマネジメントを行うことが不可欠です。先生方の温かいまなざしと前向きな声かけ、そしてデータに基づくアドバイスが、生徒の不安を和らげ、自信と意欲を持続させる原動力となります。

(株)ベネッセコーポレーション
学校カンパニー 教育情報センター長
日山敦司 ひやま・あつし



第2回出願指導 WEB 研究会及びデータネットサイトのご案内

◎第2回出願指導 WEB 研究会

特設ページにて、「D判定の生徒を前向きにさせ、共通テスト本番まで第1志望を貫かせるために入試データをどう使うか」を、具体的な面談の場面に即してご紹介しています。

リンク https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/seminar/2025/article/shutsuken2/tsukaikata/p2.html



◎データネット 2026 大学入学共通テスト自己採点集計

2026年度大学入学共通テストの平均点や合格可能性判定基準などの情報を提供してまいります。

リンク <https://dn-sundai.benesse.ne.jp/dn/center/index.html>



ウェブ連載記事 ダイジェスト

より多くの実践事例をお届けするために、これまで本誌に掲載していた探究学習と学習評価に関する連載コーナーをウェブサイト『VIEW next ONLINE』に移管するとともに、授業実践に関する連載コーナーを同サイトに新設しました。本コーナーでは、それらのウェブ連載記事の概要をお伝えします。

各記事の全編には、2次元コードからアクセスするか、<https://view-next.benesse.jp/> にアクセスし、「学校教育情報誌『VIEW next』」>「ウェブオリジナル記事」からご覧ください。

教育ニュース n-express

教育オピニオン

教育なんでも相談室

教育の今

教育イノベーション

学校教育情報誌『VIEW next』

クリック!

図 4つの問い 「電気化学」の単元での具体例

問いのタイプ	問いの位置づけ (注)	本単元における問いかけの例
とっかか りの問い	好奇心を刺激し、新しい話題に興味を持たせるための問い	(1時間目) 単1電池と単3電池の違いは何か。
先導する 問い	正解を持ち、習ったことを思い出させたり、情報を見つけさせたりするための問い	(2時間目) あなたのスマートフォンの2次電池は何か。スマートフォンはリチウムイオン2次電池以外では動かないのか。(4時間目) 充電電池の性能をどのように見ればよいのか。
手引きと なる問い	単に情報を見つけさせるだけでなく、特定の内容を探究させるための問い	(3時間目) スマートフォンの充電電池の寿命を延ばすためにはどうすればよいのか。スマートフォンの充電電池を急速充電するためにどうすればよいのか。
本質的な 問い	教科やカリキュラムの中心にあり、教科の探究と看破を促進する問い	(5・6時間目) 電池から熱が発生するのはなぜか。電池を安全に使用するために、エネルギーをどのように把握すればよいのか。

注)「問いの位置づけ」の説明文は、『「逆向き設計」実践ガイドブック』(奥村好美・西岡加名恵編著、日本標準) によるもの。※学校資料を基に編集部で作成。

「転移可能な概念的知識」の理解を深める
佐伯先生の担当科目「電力技術」は、「電気」という目に見えない現象を扱うため、生徒がその現象のイメージを頭の中で構築し、知識間の関係性を整理して概念化することが不可欠と先生は考え、授業研究に取り組んできた。同科目の「電気化学」の単元では、「転移可能な概念的知識」

「中核的な概念」
の理解が深まる
授業デザイン

工業

富山県立魚津工業高校 佐伯智成

身近な題材のパフォーマンス課題で
知識間の関係性に気づかせ、
中核的な概念へと昇華させる



さえき・ともなり
同校に赴任して6年目。
工業科、教務部、研修担当。

である「化学エネルギーから電気エネルギーへの変換」の理解が深まることを目指した。全7時間のうち、前半の4時間で1次電池と2次電池の違いなどの事象的知識を習得し、後半の3時間でパフォーマンス課題に取り組むという単元構成にした。事象的知識を活用して問題の発見と解決に取り組む過程で、知識間の関係性を概念的知識へと昇華させられると佐伯先生は考えるからだ。そして、生徒が事象的知識を習得し、知識間の関係性を見いだすことができるよう、「とっかかりの問い」「先導する問い」「手引きとなる問い」(※1、図)を提示している。

パフォーマンス課題は、モバイルバッテリーによる事故の原因を調べ、事故を防止するための注意文と製品の改良案の作成とした。注意文の作成では、3つの班に分かれて事故の原因を協働的に考えさせ、改良案の作成では、「オズボーンのチェックリスト」(※2)を用いて個人でじっくり考えた後、各目の改良案を共有した。

本記事の全編には、下の2次元コードから
アクセスしてください。



※1 いずれも『「逆向き設計」実践ガイドブック』(奥村好美・西岡加名恵編著、日本標準)で紹介されている問いのタイプ。

※2 アメリカの実業家アレキサンダー・F. オズボーンが考案した、アイデアを出すための発想法。

「中核的な概念」
の理解が深まる
授業デザイン

化学

グループでの生徒主体の学びを 繰り返す中で、「そうか!」という 瞬間との出会いをつくる

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 **榎本六秀**
つちもとむつひで

他者との「面倒臭い学び」で理解を深める

榎本先生は、一つひとつの反応を個別のものとして理解すること以上に、生徒が「次はこうなるかも」と考え、「そうか!」という気づきにたどり着き、「ほかのケースはないのだろうか」と思考を広げていく中で「反応」という概念を理解することが重要だと考える。

授業はグループワークを主体に設計されている。2つのグループに分かれた生徒が、1人1つ以上の化合物を担当。授業の冒頭でその日に取り上げる化合物が決まると、その化合物を担当する生徒が教師役になって説明する。教師役以外の生徒たちは教師役の生徒の説明と榎本先生の板書の



写真 教師役の生徒がほかの生徒に説明(上)。その後、生徒たちは自分1人で本時で学んだことをプリント上で整理する(下)。



つちもと・むつひで
同校に赴任して30年目。
進路指導主事。理科(化学)。

内容などを自分のノートにまとめる。その後、生徒たちはノートや黒板などを見ずに、自分1人で本時で学んだことや疑問に思ったことをプリント上で整理する。プリントは回収され、各グループの教師役の生徒が授業後に添削する。

教師役の生徒が間違った説明をした場合、その後の学習で生徒がおのずと誤りに気づくことが予想できるものについては、榎本先生はいちいち修正せず、「前の授業で扱った化合物と同じ反応が起こっているね」などと、「反応」という概念の理解を深めるための補足を重視している。間違いを修正する場合も、「この間違いは、本質を理解する上でも重要なね」と価値づけをする。

そのように、教師が分かりやすく説明して進んでいく学びとは異なり、他者と協働して、大きな1枚の絵を描くような学びを、榎本先生は「面倒臭い学び」と呼び、それこそが中核的な概念の理解を深める授業であると考えている。

本記事の全編には、下の2次元コードから
アクセスしてください。



解説

一定の内容のまとまりを
通じて理解する
「中核的な概念」

文部科学大臣の諮問機関である中央教育審議会では、学習指導要領の次期改訂に向けた議論を進めているが、その論点の1つが、「各教科等の中核的な概念等を中心とした、目標・内容の一層分かりやすい構造化」である。本誌2025年7月号の特集では、京都大学大学院教育学研究科の石井英真准教授は、「中核的な概念」を「單元などの、一定の内容のまとまりを通じて理解してほしい主要な概念等」とし、「中核的な概念」の下で個別の知識が統合、結集されることで、広範囲の出来事・現象の理解や予測に役立つような一般化・転移が可能で、永続性のある学力が育まれると説明した。

生徒に概念としての知識の習得や深い意味理解を促すためには、一問一答のような学びではなく、答えまでの距離が長く、思考することを要求する問いを授業で設定することが重要だ。さらに、そこに他者との協働があることで、理解がより深くなり、表現力やコミュニケーション力などの汎用的スキルが発揮されることも期待できる。

個別の知識の習得にとどまらず、概念としての知識の習得や深い意味理解を通じて「生きて働く学力」を育む授業づくりが、今後ますます求められるだろう。

本誌2025年7月号の特集の全編には、
下の2次元コードからアクセスしてください。



「やらされ探究」から「マイ探究」へ!

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Turning Point

全生徒の
探究学習を支援する
体制の構築

生徒が時間をかけて

探究学習の課題を

設定するための

体制と環境を構築

千葉県・私立芝浦工業大学柏中学校高校

芝浦工業大学柏中学校高校は、スーパーサイエンスハイスクール第Ⅲ期の指定を機に、それまで特定のクラスと希望する生徒を対象にしていた課題研究を、全生徒が取り組むカリキュラムに変更した。

具体的には、1年次に「情報」と「総合的な探究の時間」を融合した学校設定科目「SS（芝浦サイエンス）」を設置し、前期は探究学

習のサイクルを一通り体験する「ブレ探究」を行い、後期の途中から専門的な課題研究に取り組むカリキュラムに。そして、教師が生徒一人ひとりの問いに丁寧に向き合っており、担当教師30人を配置した。初めて課題研究を担当する教師は経験のある教師とペアにして、相談できる体制を整え、生徒の学びを支援するための手引きも作成した。

さらに、生徒が担当教師に相談しやすいように、夏季休業前に担当教師の専門分野の一覧表を配布。探究学習の過程で論点が変われば課題を更新することも認めた。

教科学習が課題研究につながる学びの場となるよう、学校設定科目を設置。「SS物理基礎」では、アプリを使って様々な物理量の測定を行い、探究的な学びを体験させた。



探究科主任、SSH統括室
越野貴嗣
こしの・たかつぐ



SSH統括室副部長
高澤良輔
たかさわ・りょうすけ



SSH統括室部長
須田博貴
すだ・ひろき

本記事の全編には、
下の2次元コードからアクセスしてください。



Turning Point

探究学習における
課題設定の
方針を見直す

「Will」「Can」を重視した

課題設定と地域との

つながりを通じて、

探究学習の価値を実感する

新潟県立中条高校

地域と連携した探究学習に力を入れる新潟県立中条高校。2024年度には、生徒は、地域の課題を探究学習の課題に設定したが、自分たちで実行できるアクションプランを立てられたグループは多くなかった。また、24年度に設定した課題に25年

度も継続して取り組みたいかを生徒に尋ねたところ、ほとんどの生徒が「課題を設定し直したい」と回答した。

そこで、25年度から探究学習のあり方を刷新。2・3年生の探究学習は、「Will（自分がやりたいこと）」・「Can（自分にできること）」・「Need（誰かに必要とされていること）」のうち、「Will」「Can」に焦点をあて、自由に課題を設定できるようにしたところ、生徒は多様な課題を設定して探究学習に取り組んだ。また、1年次は、探究学習に必要なスキルを養うため、インタビューやファシリテーション、デザイン思考などについて学ぶ講座を開講。さらに、1・2年生全員と約80人の地域の社会人が様々なテーマで対話を楽しむ場を設け、探究学習に欠かせない、地域とのつながりを持った。



1学年主任
佐藤達哉
さとう・たつや



教務主任
保坂和洋
ほさか・かずひろ



教頭
馬場 宏
ばば・ひろし



校長
横堀正晴
よこほり・まさはる

本記事の全編には、
下の2次元コードからアクセスしてください。



図 各観点の評価結果の組み合わせと評定の対応表

	状況	十分満足できるもののうち、特に高い程度のもの	十分に満足できると判断されるもの	概ね満足できると判断されるもの	努力を要すると判断されるもの	努力を要すると判断されたもののうち、特に程度が低いもの
2025年度から	各観点の評価結果の組み合わせ	AAA (ABA、BAA)	ABB (BAB)	BBB (BCB、CBB)	BCC (CBC)	CCC
	評定	5	4または3	4または3	3または2	2または1

A、B、Cの並び順は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の順。()の組み合わせは、「知識・技能」と「思考・判断・表現」が連動しない場合のみ。

※学校資料を基に編集部で作成。



アドバイザー

文部科学省 初等中等教育局
主任視学官

田村 学 たむら・まなぶ

北海道滝川西高校は2022年度に、各観点の評価結果の組み合わせから評定に総括する方法を採用し、23年度までその方法で評価してきた。しかし、24年度に同校に着任した三井校長が、その方法に懸念点を示し、見直しが提案された。

その懸念点とは、内規に示された3観点の評価結果の組み合わせ、すなわちA、B、Cの並び順は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の順ではなく、その組み合わせであれば、並び順は問わないことになったことだった。三井校長は、各観点で評価する内容や、観点

間の関係性を踏まえると、例えば、「知識・技能」がCで、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」がAやBの「CAA」「CBB」は極めて起こりにくいと指摘。文部科学省から示された学習評価の考え方を改めて確認した上で、起こりにくい組み合わせを評定への総括の対象から外し、妥当性があると考えられる7通りに絞ることを提案した。

24年度の後期は、その7通りを基に評定に総括したところ、特に実技を伴う教科から、「思考・判断・表現」の評価において必ずしも「技能」の活用を前提としないケースがある」といった意見が年度末に出た。例えば、発表やレポートなどによるパフォーマンス評価を行う際、「知識・技能」が「B」でも、「思考・判断・表現」が「A」

本記事の全編には、下の2次元コードからアクセスしてください。



事例で深める!

学習評価

実践校の取り組みを基に、
学習評価をより充実させるポイント
を田村先生がアドバイス

評定への総括の 組み合わせの議論を 通じて、評価の質を向上

北海道滝川西高校



左から／一條直紀（教務主任、数学科）、
三井智和（校長）、押上恭徳（1学年主任、
数学科）

になる場合があるのではないかとといった指摘だった。それを受けて、三井校長と教務部が協議して評定に総括する方法を再度見直し、25年度からは、7通りに4通りを追加した11通り（図）で評定に総括することにした。

その一連の見直しをきっかけに、評価方法を再検討する教科が出てきた。例えば、一條先生と押上先生が所属する数学科では、「思考・判断・表現」の評価の精度をより高めるための議論がなされ、答えまでの過程を書き出させて評価する課題を出すなど、定期考査の問題や発表の課題などの設計において試行錯誤している。

田村主任視学官は、同校の取り組みについて、「観点間の関係性を踏まえた評価へと転換し、評価の視点や方法を根本的に見直す機会になるとともに、教師がより納得する総括のあり方にたどり着くための重要なステップとなった」と語った。そして、観点間の関係性を踏まえた評価の質をさらに高める、授業改善にもつなげるために、評価規準を明確化することが重要であるとし、評価する内容について教師間で話し合い、言語化することを勧めた。

Web VIEWnext ONLINE

関連記事は**こちら!**

今回のテーマに関連する過去の記事は、教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。

▶ 2024年10月号

「事例で深める! 学習評価」
静岡県立静岡東高校



▶ 2024年2月号

「そうだったのか! 学習評価」
評定への総括の考え方と方法



▶ 2023年12月号

「そうだったのか! 学習評価」
評価規準の設定と運用のポイント



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任



今号からウェブサイト『VIEW next ONLINE』と連動する形で連載がスタートしたコーナー『中核的な概念』の理解が深まる授業デザイン」の取材のため、先日、富山県立魚津工業高校を訪問しました。上の写真はその道中で撮った、雲に覆われた立山連峰です。富山県は私の出身地で、幼い頃から見慣れた景色でしたが、その日は新鮮な気持ちで眺めていました。

高校生にとって勉強は、時に不安や迷いを感じさせるものかもしれません。まるで雲の中にいるように、何を目標に、どう行動すべきか、自分自身を見失うこともあるかと思いますが、努力を続けることできっと答えは見つかり、明るい未来が開けるはずです。私も大人になった今でも、困難に直面した時には立山の雄大な景色を思い出し、気持ちを落ち着かせ、乗り越えるための力に変えています。生徒たちも、自分の心の支えとなるものを見つけ、それを大切にしながら、一歩ずつ前進していったほしいと願っています。(伊藤)

アンケートのご協力をお願い

2026年度『VIEW next』高校版の誌面の検討にあたり、アンケートのご協力をお願い申し上げます。アンケートに回答していただいた方の中から抽選で200名様に、謝礼として「図書カードネットギフト」500円分をメールでお送りします（謝礼不要とご回答された方を除きます）。下記のいずれからアクセスし、詳細をご確認ください。

▶『VIEW next ONLINE』トップページ「ベネッセからのお知らせ」

▶<https://view-next.benesse.jp/fix/info/article08276/>

●回答の締め切り
2025年12月25日(木)

▼2次元コード



VIEWnext

高校版 2026年2月号

2月10日発刊
(予定)

Reader's VIEW

先生方からのご意見を
紹介します

2025年9月号へのご意見

情報活用能力の育成は、カリキュラム・マネジメントが基盤

多くの学校は、情報活用能力の育成を教科横断的な視点で十分に行えておらず、情報科や特定の教師の指導力に頼っている状況ではなかろうか。9月号の特集の記事を読み、その状況を見直す必要性を改めて突きつけられた思いだ。ただ、見直しは「情報活用能力の育成」の視点のみで進めることは現実的ではなく、より大きな視点でのカリキュラム・マネジメントが基盤になると考える。そうした基盤があるからこそ、事例1 東京都・私立山崎学園富士見中学校高校、事例2 三重県立名張青峰高校、事例3 兵庫県・私立雲雀丘学園中学校・高校の各校は、情報活用能力の育成についても教科横断的に取り組むことができているのだと思う。教師間の合意形成がいかに重要であるかを考えさせられた。愛知県立大府高校 野々山新

「情報活用能力の育成」の視点で授業を捉え直す

9月号の特集の課題整理・中京大学の泰山裕教授の記事で、「情報活用能力の育成において求められているのは、単純に新しい指導を加えるということではなく、これまでの授業を『情報活用能力』の育成の視点で捉え直し、その視点をより意識して授業を行うこと」という部分に共感した。事例1 東京都・私立山崎学園富士見中学校高校の「公共」の実践例にあった、書籍や新聞の検索、意見文の投稿といった活動自体は、目新しいものではないかもしれない。ただ、「情報活用能力の育成」の視点で捉え直したことで、「発信には責任を伴う」という観点も指導に加えられたように思う。自分の授業と情報活用能力のかかわりについて考え、その育成を目指していきたい。愛知県・私立滝中学校・滝高校 井戸康貴

記事の解説を基に、評価方法をシミュレーションしたい

9月号の特別企画「次期学習指導要領における『主体的に学習に取り組む態度』の評価の改善の背景と方向性」の記事は、分かりやすく、信頼できるソースの記事として校内で共有できると思った。記事で解説されていた評価のあり方を念頭に、本校での評価方法を現時点の評価材料でシミュレーションしておきたい。静岡県 匿名希望

どの学力層の生徒にも、教師の伴走が不可欠

「進学校の生徒は主体的に学び、主体的に行動する」とイメージする教師が多いように感じるが、9月号の「指導変革の軌跡」の長崎県立松浦高校の記事を読み、希望進路の実現へ向けた教師の伴走があるからこそ、生徒は心強く学びに向かえるのだと気づかされた。生徒の憧れにもなる大学生の力を借りることで、生徒により高い進学意欲を醸成しようという教師の考えも素晴らしいと感じた。長野県 匿名希望

情報を活用し、生徒に最適な進路指導を効率的に進めたい

総合型・学校推薦型選抜の受験希望者が増え続ける中で、教師の負担も限界に近づいてきている。9月号の「大学入試トレンド解説」の「現3年生のデータから見える、今後の進路・学習指導のポイント」の記事で紹介されていた「教科学力で合否が決まる募集単位・決まらない募集単位」を活用し、生徒一人ひとりに最適な進路指導を効率的に進めたいと思った。和歌山県立橋本高校 寺田順子



生徒と創る学びの情景

全力を尽くした先に

奈良県・私立天理高校 吉田朋史先生



「生徒が受験勉強に全力を尽くせるように、何よりも声かけと面談を大切にしています」と語る吉田先生。夏季休業中には、3年生の国立大学志望者のグループチャットに、「周りが何と言おうとも自分の可能性を信じ、現実の困難に真正面から勇気を持って挑もう」といったメッセージを毎日送った。帰省していた寮生は、「先生の言葉に励まされて、1人でも集中して勉強することができ、質問にはオンラインで先生に答えてもらったので、帰省したハンデは感じませんでした」と話す。

2学期からは、「模擬試験で重要なのは、できなかった問題を受験後に復習すること」と、繰り返し伝えている。模擬試験の結果が芳しくなく、落ち込む生徒も多い。しかし、現在の学力を理由に第1志望校合格を諦めてほしくない。勉強を続けていれば、合格のチャンスはあるからだ。入試直前まで力を伸ばし、合格を勝ち取った生徒をこれまで何人も見てきた。『『努力の最大値』を引き上げられるのが高校時代です。それはその後の人生の財産になります。生徒がくじけず、努力を続けていけるよう、最適な学習方法を生徒とともに探り、これからも全力で支援していきます』と、吉田先生は力強く語った。

よしだ・ともふみ 同校に赴任して25年目。1・3類進路指導部部長。数学科。

奈良県・私立天理高校 1908（明治41）年設立／全日制／普通科／共学／1学年約400人／2024年度卒業生進路実績 国公立大は、千葉大、大阪教育大、神戸大、奈良教育大、広島大、大阪公立大、奈良県立医科大などに37人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、天理大などに延べ416人が合格。